

第三章 社会・文化活動

第一節 文化活動

滝川市文化協会 戦後の困窮と混乱の中から、精神文化の復興と芸術文化の向上を期し、その振興を通じて明るい社会を指向する町民の願いは日毎に高まってきた。

初めは音楽鑑賞会を主として専ら芸術鑑賞等が中心で、中央から芸術家を招へいしたり、会員自らの運営によって進められた。

昭和二十一年七月、滝川公共職業安定所で、第一回「滝川音楽鑑賞の会」が開かれたり、終戦前後、滝川を訪れた芸能人をもて、滝川が全道的にも珍しい音楽のメッカとしての状況が窺い知られる。

- ・昭和十九年十月三日洪基館で、藤原義江歌劇団一行、高柳二葉、三上孝子、下入川圭祐、浅岡麗子など
- ・昭和十九年十二月 平岡養一、田中園子
- ・昭和二十一年 斉田愛子、渡辺千世、藤原義江歌劇団一行（二度目）
- ・昭和二十二年 原 信子のオペラ、四谷文子、藤井典明
- ・昭和二十四年 大谷冴子（ソプラノ）、高木東六（ピアノ）、久本成夫（ピアノ）、巖本真理（ヴァイオリン）、野辺地瓜丸
- ・昭和二十五年 斉田愛子（二度目）、渡辺千世（二度目）、佐藤良雄
- ・昭和二十六年 宮 操子、江口隆哉（バレエ）

・昭和二十八年 村尾護郎、安川正子

・昭和二十九年 諏訪根自子（ヴァイオリン）、藤原義江歌劇団一行（三度目）

また、昭和二十一年の秋、戦後初めての作品展を、当時は場所がないため警察署演武場と職業安定所の二階を借り、作品を一般から募集したが、これは、その後の文化行事の源流となっていた。

こうして、翌二十二年五月五日、創立総会が開かれ、会長に五十嵐一郎、副会長武田勝夫、佐野一夫が選ばれたのである。

そのころより、人心もやや落着き、民謡、箏曲、舞踊、演劇、バレエ等の動きも活発になったが、発表会を開くための会場が問題となった。

たまたま、社会教育法による公民館設置のことが、全国的にも高まり、滝川にもぜひ公民館をということになり、そのためにも基金を少しでも造成し、町当局を動かそうと「公民館建設基金造成」と銘うって「芸能発表会」を開くことになり、会場を当時の文化劇場で行い盛況で、これがやがて文化祭芸能発表のはしりとなり、今日に及んでいる。

協会は、各文化団体の連絡融合と親睦を図り、市の各種行事への積極参加、市民の鑑賞と憩いを高め、市の文化向上に貢献する所が多である。

発足当時の加盟団体は次の二二団体で、それぞれ私費を投じ、自ら労力的にも献身し、文化の向上のため、いろいろな行事を催して、いわゆる誠実な文化活動を続けたことは賞讃に値し、この半数は現在姿を消してはいるが、よき種の芽生えは今日まで受け継が

れ、今や一〇〇に近い団体が華々しく文化活動を展開している姿を見る時、先人の偉業を讀みえずにはいられない。

加盟団体

滝川バレエ研究会、滝川藤間会、東流昶鈴会、箏曲出村社中、箏曲櫛田社中、箏曲塚野社中、滝川バイオリン研究所、白滝合唱団、滝川管絃楽団、こまどり音楽教室、琴古会滝川支部、郡山流同好会、滝川宝生会、滝川観世会、滝川民謡振興会、滝川民謡研究会、池の坊滝川支部、小原流滝川支部、裏千家研究会、墨仙書道会、宗徧流明道会北海道支部、空知写真俱樂部

その機関誌として、「真珠」を発行、昭和二十七年には四号を出しており、滝川文化活動の一面を表している。

なお、文化協会創立以前の文化活動の歩みを挙げると、次の事項が見受けられる。

- 明治
- 〃 屯田兵時代「俳句」の兼子梅堂、浦部兎月の名あり。
 - 〃 山本タツが「華道利休流」、「茶道宗徧流」の指導をなし二代山本ツデ、三代岡崎田鶴子と続いた。
 - 〃 42 「箏曲生田流」教授井上ナミ、奥許神部東枝、門下生をもつ。
 - 〃 45 「箏曲山田流」山本喜美勢、教授する、「謡曲観世流」高畑雄五郎に続く。
 - 大正3 「華道松月流古道」前山徳太郎、杉本文吉等、男性により同志的に行われる。
 - 5 「謡曲宝生流」野村巖によって始められ、寒河江巧その後を引き継ぐ。
 - 〃 6 「尺八琴古流」山本新太郎(種羊場)の名あり、「華道池の坊」他からの師により始まり、「俳句」吟風社が酒井弧舟、林畝山等により、また、木の芽吟社が白山友正によって行なわれる。
 - 〃 11 「菊花友の会」発足、会長に広部伊織がなる。

第三章 社会・文化活動

大正12 「短歌」金子協平が金の鈴を出す。

昭和5 杉村定計宅で尺八、「滝川ハーモニカバンド」が、鈴木善治により始められる。

〃 8 「音楽協会」と改称、和久井重一を指導者とする。その後新谷早苗会長となり、NHK札幌から放送、十四、十五年もラジオ放送、慰問演奏を続ける。

〃 22 「滝川管絃楽団」と改称する。

〃 7 「盤景紫山流」杉村哲子支部長となる。

〃 9 「舞踊藤間流」の佐々木舞踊研究所発足する。藤間勘太郎名取教授免許となる。

〃 2 「短歌」滝川純正詩社支部、石黒白萩

〃 4 「新短歌」支部となる。

〃 10 「滝川歌人会」創設、石黒白萩、金子照葉、白井敏三等により新歌人祭を発行。

「俳句」笹笛吟社が、相馬冬雨楼、石黒白萩、林畝山等により続けられ、滝川俳壇の全盛時代をつくる。

〃 11 「書道」御手洗書道会が少寛史山により始められ、その後「墨仙書道会」と改称する。

〃 8 「将棋」丹野俊次郎により始められる。

〃 10 「滝川棋友会」発足、大竹竹蔵会長となる。

〃 16 「華道池の坊」北空知支部結成、浅田きた支部長となる。

〃 18 「三曲若菜会」支部発足する。

文化協会は当初、体育スポーツ美術思想綜合協力機関として、現在の文化協会とは違った、相当幅広い分野をもっていたことが解かるが、その後、文化祭芸能発表・展示会が中心となり、体育関係は、体育協会の設立により、性格もすっきりとした。

文化協会はそれ自身が事業団体ではなく、活動の主体は加盟単位団体又はその連合体であるとの原則によっている。

芸能発表・展示会 最初は警察署・職安を借りて行ったが、公民館の建設の願いは、昭和三十三年八月待望の市民会館落成となり、芸能祭りは会館で、展示会は昭和二十六年から一小、三小、明苑中などで開催、市民の期待にこたえてきた。

その後、人口増や大ホールの必要性が高まり、江部乙町との合併後、文化センター建設の問題がおこり、昭和四十八年六月、文化センターの落成を見た。

文化センターの開館にあたっては、滝川市より要請があり、同会館記念行事実行委員会（委員長武田勝夫）を組織、落成記念芸能・展示発表として、文化団体加盟団体参加協力のもと、新装なった文化センターを市民に披露され、芸能、展示発表がなされた。その時のプログラム内容は次のとおりである。

芸能発表―大ホール
 六月二十三日 詩吟、音楽、バレエ 六月二十四日 邦楽、邦舞、民謡、太鼓
 六月二十五日 老人の芸能、若者の集い
 六月二十六日 館内自由見学、茶室披露、六月二十七日 子ども音楽会
 展示発表―会館棟
 六月二十二日～二十七日 華道、盤景、手芸、刀剣、写真、銘石、絵画、文芸

また、この間、国では文化庁、都道府県では文化振興課が置かれ一市町村の文化活動も広域化し、昭和四十三年五月、空知文化団体連絡会が発足、初代会長に武田勝夫が選任され、同四十四年度には第一回空知芸能祭を、滝川市を会場に開催され、以後この芸能祭で管内文化団体の交流が活発化されてきた。

なお、昭和四十六年四月、江部乙町との合併による新滝川市の誕生によって、ここから滝川市民文化祭の第一回目が始まり、それ以

来毎年文化祭は、江部乙会場、滝川会場にわかれ芸能発表と展示発表が行われ、発表内容についても、市民文化祭ということで、加盟する各単位団体と一般市民の参加によって行われている。

このような内容のもとに、滝川会場においては、発表参加団体が年々増加しているもので、展示及び芸能においては、毎年二部（二期）に分けて発表。絵画や書道は独立した会場として高林デパートなどを利用するようになり、発表内容の増大化はそれぞれ年間を通じ各部門ごとに、時期をとらえての開催など、文化祭開催の方向も変わろうとしている。

加盟団体沿革―創立以来―

◎滝川ヴァイオリン研究所 昭和二十八年九月、「児童の情操と音楽教育」を目的として創設する。

所在地 滝川市大町二六 木原義春 会員数八〇名
 歴代会長 初代 森秀一郎 昭二八・九

◎滝川管弦楽団（過去の名称 滝川ハーモニカバンド、滝川音楽協会）昭和五年、「純正な音楽の実技を通して互いの情操を高める」を目的に創設する。

所在地 滝川市大町二六 木原義春 会員数二三～四〇名
 歴代会長 初代 新谷早苗 二代 鈴木善治

◎ヤマハ音楽教室 昭和三十四年九月十九日、「オルガン、ピアノによって情操教育を指導する」目的をもって創設する。

所在地 滝川市大町八 中川 斉 会員数七〇名
 歴代会長 初代 中川 斉 昭三四・九

◎白滝合唱団 昭和二十四年九月、「世相混沌たる今日、若い人達

にうるおいのない野卑な歌の多い中、少しでも若人の心に潤いと喜びを持つよう、美しい歌、きれいなハーモニーと共に楽しさを味わうグループづくり」を目ざして創設する。

所在 滝川市栄町 川崎四郎 会員数三〇名
歴代会長 初代 浅野秋夫 昭三・九 二代 美島 孝

◎こまどり音楽教室 昭和三十二年五月、「児童、生徒の音感教育に資する」目的で創設する。

所在 滝川市栄町三丁目四番 神部富美子 会員数四〇名
歴代会長 神部富美子

◎日赤音楽奉仕団 昭和四十年三月、「軽音楽を通じて相互の教養を高め、市民文化の向上に寄与する」を目的に創設する。

所在 滝川市大町市役所内 福田正巳 会員数一八〇名
歴代会長 初代 真田整一 二代 森 憲明

◎市民合唱団 昭和四十年九月、「音楽を通して相互の教養を高め市民文化の向上を図ろう」と、創設したものである。

所在 滝川市大町市役所内 中文雄 会員数三〇名
歴代会長 奈良勝博

◎小原流国風会空知支部一照会 昭和二十五年五月「華道の振興普及を図り、文化の向上に資する」を目的に創設する。

所在 明神町二丁目 本間如照 会員数一〇〇名
歴代会長 初代 本間治助 二代 本間如照

◎アカンヤ滝川支部 昭和二十一年三月一日、「伝統の中に近代を確立する抒情俳句を主眼として発展し、現在は生活の歌声を主唱する」を目指し創設する。

所在 滝川市大町 石黒白萩 会員数一五名

歴代会長 初代 石黒白萩 二代 相馬冬雨郎 三代 吉田えいじ
◎水原帯滝川支社 昭和二十四年十二月一日、「生活俳句を主眼として働く者の文芸振興」を目的に創設したものである。

所在 滝川市泉町一八六 見沢一鬼 会員数五名
歴代会長 初代 川端麟太 二代 見沢一鬼

◎原始林滝川支社 昭和三十五年、「短歌の道を学び豊かな人間性を育てる」を目的とし創設する。

所在 朝日町一四 野田牧聖 会員数一八名
歴代会長 野田牧聖

◎東流昶鈴会 昭和二十一年一月、「東流舞踊を通しての文化向上を目指し研鑽し、日本舞踊の普及に努力、子弟育成に精進する」を目的とし創設された。

所在 滝川市栄町四七六 東 昶鈴 会員数四〇名
歴代会長 初代 若松由五郎 昭三・一

◎アマチュア写真クラブ 昭和三十一年十月三十一日「写真同好者による技術の向上を目指す」を目的に創設する。

所在 滝川市緑町 滝川高校内 藤波孝成 会員数三〇名
歴代会長 藤波孝成

◎斉藤書芸社 昭和三十七年十月一日、「伝統ある正しい書道を通して豊かな人間性を育てよう」として創設する。

所在 花月町一一五 斉藤露石 会員数一八名
歴代会長 斉藤露石

◎木くづ会 昭和四十一年五月「木彫を通して家庭に於ける情操陶冶を図る」を目的に創設する。

所在 本町三六三 広部とみ子 会員数一四名

歴代会長 広部とみ子

◎札幌木こり会滝川支部 昭和四十二年十一月「木彫工芸の技術を練磨し情操を高める」を目的とし創設する。

所在 東滝川七三五 平沢正子 会員数一八名

歴代会長 平沢正子

◎ダリヤ同好会 昭和四十八年「ダリヤの花づくりを通して地域的情操を高めることに努める」を目指して創設する。

所在 黄金町 中川喜夫 会員数五〇名

歴代会長 中川喜夫

◎滝川市カウンセラー協会 昭和四十二年十月九日「青少年教育並びに産業教育に共通する人間形成に必要なあらゆる課題の共同研究」を目的に創設する。

所在 滝川市東町六八 前野満雄 会員数二三名

歴代会長 柳元 豊

◎郷土研究会 昭和三十一年二月二日、「郷土の調査研究をし資料を整え、郷土文化の向上に寄与する」を目的に創設する。

所在 滝川市一の坂町 藤波孝成 会員数二八名

歴代会長 初代 藤波孝成 昭三 二代 三浦光正 昭四

現在 (昭和五十二年)

◎滝川三曲会 昭和二十八年十月十八日、本町五丁目四の一八に、三曲会事務局を置き、会員三五〇名をもって、「会員の親睦と技能を向上させ、邦楽(三曲)の中核的推進力となり、文化の向上発展に斯道を通じ貢献する」を目的に創設する。

歴代会長 久保茂雄 昭和六〇・一八

◎琴古流尺八滝川琴古会 昭和二十三年十月一日、滝川市本町五丁

目四の一八に所在、会員一五名をもって「邦楽三曲の合奏研究と発表を通してその普及に努め、技能の向上により中核的推進力となり、会員の親睦と文化の向上に貢献する」を目的に創設したものである。

歴代会長 初代 日野鈴涉 昭和三〇・一

◎都山流尺八同好会 昭和三十三年四月一日、滝川市泉町一三五番地九五に所在、会員三名にて「都山流尺八の研究練磨とその普及、会員相互の親睦向上に努める」を目指し創設する。

歴代会長

初代 小林安治 昭和三〇・一 二代 石川協山 昭和三〇・一

◎滝川若菜会支部 昭和十八年一月、栄町一丁目九一四、出村雅楽都美を所在とし、会員二〇名「相互の技術向上、親睦のため三曲演奏会の外、研究発表会により斯道の精進と前進に努める」を目的とし創設した。

歴代会長

初代 根井 清 昭和六 二代 武田勝夫 昭和三

◎米内山社中 昭和三十九年十一月、西町九番地 米内山雅楽泰を所在とし、箏曲・三絃教授を目的に創設、会員数二〇名である。

歴代会長 初代 米内山雅楽泰 昭和三九・一一

◎生田流正派滝川三曲会山口雅楽優社中 昭和二十八年十月十八日 本町五丁目一の七、山口雅楽優を所在に、会員数三五名「日本音楽(邦楽)の研究、普及に努める」を目的に創設する。

歴代社中代表 初代 塚野雅比都

◎森谷雅楽瑞社中 昭和三十八年六月、江部乙町東十三丁目、森谷

照子、会員二十九人をもって「みんなが楽しめる邦楽の普及」を目的として創設する。

◎生田流正派若菜会榎田社中 昭和二十八年十月十八日、明神町四一〇、榎田雅楽美峰に所在、会員数八〇名、「邦楽箏曲三絃の研究と発表を通し、その普及に努める」を指す。

歴代会長 榎田雅楽美峰

◎生田流正派若菜会北村社中 昭和四十五年十月二十八日、泉町一三〇―一五、北村雅楽秀峰に所在、会員数三〇名、「邦楽箏曲三絃の研究と発表を通してその普及につとめる」を目的に創設する。

歴代会長 北村雅楽秀峰

◎生田流正派静調会北出社中 昭和三十五年十月二十四日、大町二一―一、北出雅澄、会員数二五名をもって「邦楽箏曲三絃の研究と発表を通してその普及につとめる」を目的に創設。

歴代会長 北出雅澄

◎滝川民謡連合会 昭和四十一年四月一日、各会代表者が集まり、竜正会、振興会、研究会、滝鉄会、美声会の五支部で発足する。翌四十二年、西町民謡会、四十四年には隆城会、四十五年、江部乙会鵬生会、五十年新生会等が入会し、退会もあり、現在は竜正、振興、晴友、研究、隆城、鵬生、江部乙、新生会の八支部、滝川市西町四〇四の一四、阿部弘を所在とし、会員一八二名、「各種民謡の研究を通じ、会員相互の識見と技能の陶冶につとめると共にその普及を計り、民謡の発展と品位の向上につとめる」を目的とし進めている。

歴代会長

初代 中村正男 昭和四一・四一 二代 福島立治 昭和四六・一・二八
◎滝川民謡竜正会 昭和三十八年十月十一日、「民謡愛好同志の協力により、趣味を豊かに個性を高め、会員相互の親睦をはかる」を目的として創設、明神町四丁目二―二三、石坂繁夫に所在、会員数一五名である。

歴代会長

初代 菊地竜峰 昭和三〇・二 二代 川野金晴 昭和四一・一六

三代 田中正雄 昭和三二・八 四代 川野金晴 昭和四一・一六

五代 石坂繁夫 昭和三二・八

◎滝川市民謡振興会 昭和三十四年九月二日、「民謡同好会の協力により、趣味を豊かにし品位を高め、郷土民謡の振興を図る」を目的として創設、黄金町西四丁目一の二五、寛下恭久に所在、会員数三二名である。

歴代会長 初代 中村正男 昭和三四・九・二

◎滝川民謡晴友会 昭和三十四年九月十日、「各種民謡の研究を通じ、会員相互の識見と技能の陶冶につとめるとともにその普及をはかり、もって民謡の発展と品位の向上につとめる」を指し創設、朝日町西二丁目六の九、山上晴春に所在、会員数二二名である。

歴代会長

初代 宇津野信一 昭和三〇・一 二代 門脇佐一 昭和三三・四・一

三代 稲垣元信 昭和三三・四・一 四代 南 義夫 昭和四一・四・一

五代 北田豊次郎 昭和四一・一 六代 少覚 納 昭和五三・一・一

◎滝川民謡研究会 昭和三十九年十一月十日、「民謡愛好者同志の協力により、趣味を豊かにし会員相互の親和をはかる」を目的として創設、花月町二〇―一、太田忠五郎に所在、会員三〇名である。

歴代会長

初代 東金次郎 昭和元・二・〇 二代 石坂繁夫 昭和四・二・〇

◎滝川民謡隆城会 昭和四十三年七月十日、「各種民謡の修練を通じて、会員相互の親睦を深めると共に人格陶冶と技能の向上に努める」を目的とし、西町四〇四の一、阿部弘に所在、会員三一名である。

歴代会長 初代 福島立治 昭和四・七・〇

◎滝川民謡鵬生会 昭和四十三年十二月二十日、「民謡を研究し永久に保存し、併せて人格の向上と会員相互の親睦をはかる」を目的とし、一の坂東三丁目一二の七、伊藤房に所在、会員数一四名である。

歴代会長

初代 小枝春雄 昭和四・三・〇 二代 佐藤一善 昭和四・六・六

三代 米田 実 昭和四・一・九

◎滝川民謡新生会 昭和四十九年十一月十八日、「民謡愛好者同志により正しくこれを広め、会員相互の親睦をはかる」を目的に創設朝日町四丁目七の三五、峯村孝に所在、会員数一五名である。

歴代会長 初代 峯村 孝 昭和四九・一一・一八

◎滝川竜栄太鼓 昭和三十七年、「青少年の健全育成のため、郷土芸能の普及と発展、会員相互の親睦と向上を図る」目的をもって創設、栄町二丁目八の一三、三田三郎に所在、会員一五名である。

歴代会長

初代・三代 中西清一、二代 高橋勉男

◎滝川太鼓保存会 昭和四十五年三月、市民に親しまれる新しい芸能の創立をねがって設置、明神町四丁目二の三四、石坂繁夫に所在

会員二四名である。

歴代会長 初代 石坂繁夫

◎滝川市文学懇話会 昭和四十二年一月二十三日、郷土の文学振興に寄与するを目的として創設する。本町六丁目四一一、野田牧聖に所在し、会員は、歌人会、詩話会、俳句作家クラブ、川柳社である。

歴代会長 吉田えいじ 昭和四

◎滝川詩話会 昭和四十三年十二月、「滝川市を中心とする詩の愛好者によりその向上進歩のため研鑽する」を目的に創設する。

滝川市大町三丁目三―二四、武田方所在、会員数二〇名である。

歴代会長

初代 浅野明信 昭和四三・一二 二代 須田五郎 昭和四七・一

◎滝川歌人会 過去の会の名称 滝川純正詩社支部・滝川歌人会・滝川短歌会 昭和二年、「短歌同好者を育成し、作品発表、合同歌集の発行などをを行う」を目的とし創設する。本町六一四、野田牧聖に所在し会員数五〇名である。

歴代会長

初代 石黒白萩 昭和二 二代 斉藤昭二 昭和五・一

三代 田中茂八 昭和三

◎滝川俳句作家クラブ 昭和三十五年十月一日「各流派の俳句作家が合同で研修、それぞれの立場から意見を出し合って向上を図る」を目的とし創設、泉町一八六、見沢一鬼に所在、会員二五名である。

歴代会長 初代 石黒白萩

◎滝川川柳社 昭和三十九年九月十二日、「会員相互間の川柳向上をはかり、広く各地川柳社と交友を深め更に親睦をはかる」を目的

に創設する。本町五丁目四―二六、竹内茶目坊に所在、会員数二〇名

歴代会長

初代 根井冬壺 昭和元・九・三 二代 相馬冬雨楼 昭和四・四・〇

◎壺俳句会 昭和四十八年十一月一日、「古典俳句の研究並びに俳句創作の向上と普及につとめる」を目的に創設、大町一六一―一武内夕彦に所在、会員一五名である。

歴代会長 初代 武内夕彦 昭四二

◎滝川宝生会 大正五年「宝生流謡曲、仕舞の研究と発表を通してその普及につとめると共に、その研究をとおして会員相互の親睦と向上をはかる」を目的に創設、朝日町西二丁目一番、男沢義久に所在、会員数二四名である。

歴代会長

初代 野村 巖 大正五 二代 寒河江巧(指導を兼ねる) 大正二〇

三代 男沢義久 昭和四

◎観世会 過去の会の名称 観世流「鶴亀会」 昭和三十八年八月二十日、「古典謡曲の技術的習得をはかり、日本の古典芸術を通して、日本人の深い心の動きを研究、また謡曲文字を通して、日本の古代生活様式・生活感覚と現代との比較研究」を目的として、一の坂町西一―一五、芳村良元に所在、会員数一五名である。

歴代会長 初代 芳村良元 昭和元・八・三

◎滝川華道連盟 昭和四十四年十一月、文化向上のため、互流派向上発展を旨とし、一の坂町西三―四―七、古川とみに所在、会員は七流派支部長七名である。

歴代会長 初代 古川とみ 昭和四二

◎華道会滝川支部 過去の会の名称 華道会池坊橋会 昭和十六年四月、

華道文化向上のため、赤平市本町二の二、中島啓喜を所在とし、会員数は支部教授者三八名である。

歴代会長

浅田きた、石渡かつえ、窪田武明、三上金風、山根喜作、古川とみ、中島啓喜

◎日本生花司花月堂古流滝川支部 昭和四十二年七月一日、「滝川市及び周辺の会員相互の親睦をはかり、その協力によって当流華道の発展を推進する」を目的とし、一の坂町西三―四―三九、細田恵美子に所在、会員数一五名である。

初代支部長 細田恵美子 昭和四・七・一

◎岡田社中(青葉会) 昭和四十年四月一日、草月流の発展と会員の親睦、文化の向上を願って創設、栄町一―一四―一〇に所在、会員数二〇名である。

歴代会長 岡田律子(青千) 昭和四・四・一

◎池坊光明流滝川支部 過去の会の名称 池坊清月派滝川支部 昭和五十二年一月二十三日、池坊光明流滝川支部発展のため、華道の研究と発表を行い、組織的に団結して会員相互の親睦に寄与するを旨として創設、花月町一―三―二三、奥祥華に置く。会員 教授会員二七名

歴代会長 初代 少覚 納 昭和五・五・〇

◎滝川小原流 昭和四十年三月一日、「華道をとおして研究と会員相互の親睦と向上をはかる」を目的とし創設、本町六丁目一の一八岸本竹野に所在、会員数一〇〇名

歴代会長 岸本竹野 昭和四・三・一

◎錦城古流滝川支部 昭和三十九年六月、華道の研究と発表を通し

その普及につとめ、華道を通じて人間性を高め親睦を目的にして創設、一の坂東三丁目四の二一に所在し、会員数四七名である。

歴代会長 上西理環 昭和元・六

◎池坊清月派滝川支部 昭和三十六年九月「美術展、北海道いけ花百人展で活躍し、五大流派と交流をもって、常に新しいものに挑戦し研究を重ねる」を目的に創設する。明神町四丁目の一、白木晶蘭に所在、会員数一三名である。

歴代会長 初代 佐藤晶宛 二代 奥 晶華

◎滝川茶道連合会 昭和三十五年九月一二日、「茶道を通して各流派会員相互の親睦と向上をはかり茶道の普及につとめる」を目的に創設、栄町三丁目四―九、北村宗喜に所在、会員数七三名である。

歴代会長

初代 山本宗鶴 昭和壹 二代 岡崎宗知 昭和五

三代 北村宗喜 昭和五

◎茶道宗偏流滝川分区 過去の会の名称 茶道宗偏流淑徳会、茶道宗偏流明道会北海道支部、茶道宗偏流不審庵会北海道地区滝川分区

明治三十五年創設、大町三丁目三番、相川宗純に所在、会員数二四名

歴代会長

初代 山本タツ(一松庵、宗鶴) 明治七 二代 山本ソデ(一松庵、宗鶴) 昭和一〇

三代 岡崎田鶴子(碧水庵宗知) 昭和翌 四代 相川純子(川月庵宗純)

◎玉川遠州流 昭和二十一年、文化向上のため、主に礼儀作法を目的とし創設、花月町一丁目七―二八に所在、会員数一五名である。

歴代会長 初代 伊藤有照

◎橋 会 過去の会の名称 むつみ会 昭和三十年四月、茶道表千家、華道家元池坊教授者養成を目的とし、栄町一丁目二―一九に所在、会員数二〇名である。

歴代会長 小玉韶鳳

◎表千家岡田社中 昭和四十年四月一日、表千家の発展、一服の茶による会員の心の交流、やすらぎ、優しさ、親睦をはかるを目的に創設、会員数一〇名で、栄町一―一四―一〇、岡田律子に所在する。

歴代会長 岡田宗青

◎和交会 昭和二十三年、「茶道を通じて人格陶冶をはかり、交友を深める」を目的として創設、東町 今野貴美子に所在、会員数一五名である。

歴代会長 初代 中村宗村

◎茶道裏千家淡交会和美会 昭和三十五年二月一日、「茶道の研究とその普及、茶道を通し交友の輪をひろげる」を目ざし創設、会員数一〇名で、栄町三丁目四―九、北村宗喜に所在する。

歴代会長 北村宗喜 昭和三五・二・一

◎上田社中 昭和四十年五月八日、茶道裏千家の普及と茶会などを通じ、茶道の真の良さを知ってもらおうと創設する。

本町三丁目一―一三 上田宗輝に所在し、会員三名(有資格者)

◎茶道裏千家流花尻社中 昭和三十年四月一日「茶道の研究、茶会を通して普及につとめ、会員相互の親睦向上をはかる」を目的として創設、西町一―一六花尻宗令に所在、会員数一一名である。

◎表千家細田社中 昭和二十五年一月十日、各流派の親睦とその協

設、泉町八六の五に所在、歴代会長西岡照子、会員数五〇名である。

◎村山にんぎょう教室 昭和四十五年四月一日、「和紙金らんを使つての人形製作指導と人形を通して生活の中にあるおいを求めてその楽しさを探る」を目的として創設、大町三丁目一―七に所在、会員数二〇名である。

歴代会長 村山千恵子

◎真多呂人形河野教室 昭和四十五年九月二十三日、趣味を兼ね一人でも多くの人たちに自分の手で作り出す楽しさを進め、京都加茂由緒ある人形、平安王朝の優雅さや、室町、江戸時代の童心の世界を現代にもマッチした新しい感覚の人形の良さを知ってもらおうと創設したもので、大町二丁目四―二二に所在、会員数一三名である。

歴代会長 初代 河野トミエ

◎武田フラワーデザイン教室 昭和四十五年九月一日、生花又はリボン、布、パン等で作った花が、最も美しくみえるように、カラーハーモニー、バランスを考え、身（特に花嫁）を飾り、部屋、会場を飾り、くらしを豊かにしようと創設、本町一丁目一―一八、武田万里子に所在、会員数二〇名である。

◎アートフラワー教室みゆき 昭和四十九年七月、最近生活の中に花を使う機会が多くなってきたので、造る喜びと芸に心を豊かにして、会員相互の親睦と花の教養を深めて行きたいと考え創設、本町三の五みゆき美容室内、奥山光子に所在、会員数八名である。

◎滝川桜雲会 昭和三十五年三月、「漢詩及び吟詠の研究を重ね、

情操教育とその普及につとめること」を目的とし創設、東町四八の五、中田ミサに所在、会員数九〇名である。

歴代会長

初代 越沢三郎 二代 川越クニエ 三代 中田ミサ

◎鶯鷺会 昭和三十八年三月一日「吟詠を通じて礼と節を基範に、会員相互の信頼を深め、情操と高邁な気概を養い、尚かつ健康と文学の向上」を目的とし創設、大町四丁目一―一、丹野雅子に所在、会員数七四名である。

歴代会長

初代 熊本紹鷺(きみよ) 昭和元・三・一 二代 太田紳鷺(盛夫) 昭和四・三・一 三代 丹野鷺園(雅子) 昭和四・三・一

◎岳風会新十津川支部滝川道場 昭和三十九年四月一日、「日本詩吟学院の主唱する芸術的詩歌吟詠の道を伝習研讀し、典雅にして崇高なる精神の育成と人格の陶冶を目ざし、あわせて趣意を通じて親睦と吟道の普及発展に尽すこと」を目的として創設、東滝川四二〇 齊藤秀希に所在、会員数四〇名である。

歴代会長

初代 田中健次 昭和三 二代 鈴木シゲ 昭和四 三代 齊藤秀希 昭和四

◎鶯窓流鈴鷺会 昭和四十二年八月二十二日、漢詩の研究と吟詠の発表を通してその普及につとめ、漢詩の研究を通し会員相互の親睦と向上をはかるうとして創設、栄町二丁目五―一四、前田トシに所在、会員数一八名である。

歴代会長 前田トシ 昭和四 六三

◎泉桜会 昭和四十六年一月十日、詩吟を通して心身を練磨し、健

康で明るく会員の親睦と向上をはかるを目的に創設する。栄町四丁目七―三、香西キクに所在、会員数一三名である。

歴代会長 香西キク

◎霞桜会 昭和四十六年一月十日、「漢詩、和歌等の吟詠を主体とし詩舞、書画道・吟華道等を取り入れ、趣味を通じて情操、人格の陶冶を図り、斯道の発展に努力すること」を目的に創設、花月町三丁目二―二五、佐藤鶴子に所在、会員数二五名である。

歴代会長 初代 佐藤鶴子 昭和四一

◎滝川自然石趣味の会 昭和三十八年一月十日、石を鑑賞し趣味の向上と交友を深め、会員相互の親睦を図るを目的に創設、栄町四丁目六―二三、高沢清に所在、会員数三八名である。

歴代会長

初代 金子協平 昭和三〇・一・二〇 二代 小池晴夫 昭和四〇・二・二〇
 三代 金子協平 〃 四〇・二・二〇 四代 上野圭介 〃 四一・二・二〇
 五代 上野圭介 〃 四一・二・二〇 六代 高沢清 〃 四二・二・二〇
 七代 高沢清 〃 四二・二・二〇

◎滝川市菊花同好会 過去の会の名称 滝川町菊花友の会 大正十一年三月五日、「菊作りは土造りからといわれ、土に親しみながら菊花栽培技術の研究と発表を通じその普及につとめ、会員相互の親睦と和をはかり、真摯な精進と菊花への愛情と健康維持を世の人々にうったえる」を目的に創設、大町二丁目八番地、阿部義次に所在、会員数二六名である。

歴代会長

初代 広部伊織 大正二〇・四・一 二代 南部外吉 昭和三〇・四・一
 三代 舟津幸作 昭和三〇・四・一 四代 松沢寛 〃 四一・四・一

五代 阿部義次 昭和三〇・四・一

◎動力車菊花秋光会 昭和三十年五月一日「菊花の栽培研究を通してその普及につとめ、会員相互の親睦と向上をはかる」を目的に創設、西町鉄道用地、洞内時晴に所在、会員数三三名である。

歴代会長

初代 伊藤博行 二代 柳岡伝次郎 三代 赤川一雄 四代 堀口栄顕 五代 洞内時晴

◎滝川趣味の盆栽会 昭和四十九年十月一日、盆栽を通じ親睦と融和をはかるを目的として創設、大町四丁目四―三七、草薙新一に所在、会員数二八名である。

歴代会長 林 隆史 昭和五〇・三・一

◎滝川アマチュア無線クラブ 昭和四十五年四月、アマチュア無線の健全なる発達を図り、会員相互の交友を増進し、併せて無線科学並びに文化の向上と発展に寄与する」を目的に創設した。

その概況については、後述する。

◎子どもの読書をすゝめる会 昭和四十四年七月十一日、「父母や教師、その他子どもの読書に関心を持つ大人を対象に、子どもが読書にどのようなかわりを持つか、さまざまな角度から学習をして少しでも情操豊かな子どもを育てることに努める」を目的に創設、緑町四滝川高校内に所在、会員数五二名である。

歴代会長 武田セイ 昭和四四・七・二 指導 木内敏夫

◎滝川市話し方研究会 昭和四十八年一月二十六日、「話し方研究を通して自己の信念を正しく相手に伝える技術を練磨し、正しい生き方を見出すとともに、地域社会の発展に寄与すること」を目的と

し創設、西町二四二の一、滝川西高内、梁田剛に所在、会員数二〇名である。

歴代会長 初代 花摘誠吉 昭和四・一・二六

◎日本棋院滝川支部 昭和二十六年「囲碁の研究、大会を通して普及につとめ、会員相互の親睦と棋力の向上をはかる」を目的に創設、明神町三―三―二二囲碁サロン米林喜一に所在、会員数四五名である。

歴代会長

初代 山下菊太郎 昭和六

二代 山田武雄 昭和四〇・一〇・三

三代 今野正義 昭和四三・三三

◎滝川市青少年演劇研究会 昭和五十一年十月三十一日、「あらゆる演劇活動を通じて、演劇する喜びを深め、会員相互の人間性、芸術性、市民性を高めると共に、健全なる演劇集団として恒久的運営を目指し、広く地域文化発展に寄与することをねらう」を目的にし創設、緑町四丁目三―八に所在、会員数一九名である。

歴代会長 田口孝太郎 昭和五二・一〇・三

◎滝川刀剣会 過去の会の名称 滝川美術刀剣会 昭和四十二年四月一日、「埋れた美術的刀剣類の正規の登録手続きの指導と共に、美術的刀剣類の鑑賞、文化財としての認識を深め、保存・手入れ・鑑定等を正しく指導する」を目的に創立、栄町三丁目三―五紫苑内、村元豊信に所在、会員数、正会員一三名である。

歴代会長 初代 岡部伊治 昭和四三・一より現在

初代支所長 村元豊信 昭和四三・四より現在まで

◎民舞同好会「滝川岳常会」と会名変更、師範に佐藤岳常を迎え、

代表は山本久子（朝日町西三―八―三）となる。

△滝川市文化協会三十周年記念誌より▽

◎新加盟団体 子供の文化を考え、子供に生の演劇・人形劇・音楽の観賞と、子供と親・青年達で楽しいキャンプや集いをもとうと、観賞団体「滝川おやこ劇場」会長米田満知子、事務局渡辺孝子（東滝川四四八の一三）、会員数五〇名（発足当時）が加盟する。

◎紫山流川辺社中（盤景、会員数二二名）も新たに組織され、活動中である。

◎第二回北海道芸術新賞受賞「手古奈」空知オペラ研究会

△オペラ「手古奈」上演企画▽

目的

- 一 現代青少年に美しい人間の魂をとり戻したい。
- 二 音楽と演劇の結びついた総合芸術であるオペラに対して理解させ、あわせて地方文化の向上に役立てたい。
- 三 青少年が一つの目的で創造活動に専心協力し種々の経験を重ねることによって、生きる力とよるこびを得させたい。

主催 空知音楽連盟、後援 滝川市教育委員会、江部乙町教育委員会、文部省、道教委、北海道新聞、北海道放送、日本楽器

上演 とき 昭和四十四年七月十二日（土）・十三日（日）

ところ 北辰中体育館、滝一小体育館、赤平市民会館

業務分担 運営委員長 森本幹夫 総務 松浦 真 会計 中井啓子 渉外

中文雄

スタッフ 演出 横山正勝 舞台監督 松浦 真 指揮 松浦 真 合唱指導 横山正勝 演出助手 加地昌子 美術 川村恒夫 照明効果 達見 博

衣裳 中井啓子 オークストラ 北辰中・滝川室内管弦楽合同、オケのマネー

ジャー 石山昌司・熊沢厚樹 合唱 滝川市民合唱団 同マネージャー 川崎

四郎 キャスト 手古奈 吉川順子 あげ彦 島田 進 やじ児 山本由美子

滝川市文化協会加盟団体一覧表

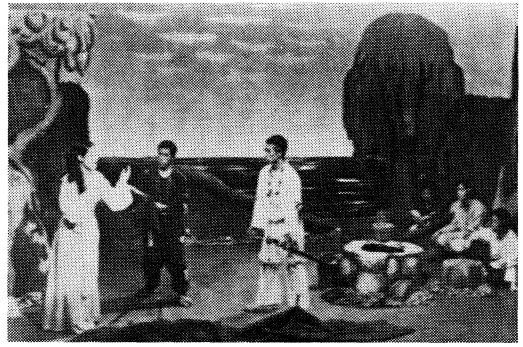
会長 武田勝夫
昭和54.1.31

第十三編
生活と文化

部門	団 体 名	代 表 者	住 所	会 員 数
三 曲	三 曲 会	久 保 茂 雄	本町1-4-24	191
	琴古流 日 野 社 中	日 野 鈴 涉	本町5-4-18	10
	都山流 尺 八 部	石 川 協 山	泉町2-1-25	4
	生田流正派 若菜会 櫛田社中	櫛田 雅楽美峰	明神町4-10-25	45
	山田流 手 嶋 社 中	手 嶋 双 勢	江部乙町中央	23
	生田流正派 出 村 社 中	出村 雅楽都美	栄町1-9-4	31
	生田流静調会 山 口 社 中	山 口 雅楽優	本町5-1-7	22
	生田流正派 森 谷 社 中	森 谷 雅楽瑞	江部乙町東13丁目	19
	生田流旭会 米 内 山 社 中	米内山 雅楽泰	西町2-7-25	16
	生田流正派 若菜会 北村社中	北村 雅楽秀峰	泉町130-5	13
生田流静調会 北 出 社 中	北 出 雅楽澄	大町2-1-31	8	
民 謡	民 謡 連 合 会	福 島 隆 治	西町3-7-2	175
	滝川民謡 隆 城 会	福 島 隆 治	西町3-7-2	29
	振 興 会	寛 下 恭 久	黄金町4-1-25	31
	晴 友 会	少 覚 納	大町6-1-22	25
	研 究 会	太 田 忠五郎	花月町1-1-13	20
	鵬 生 会	米 田 実	朝日町西4-5-8	12
	竜 生 会	石 坂 繁 夫	明神町4-2-33	16
	吟 栄 会	新 保 信 義	本町5-6-9	25
	新 生 会	峯 村 孝	朝日町西1-27-5	17
	竹 陽 会	寛 下 恭 久	黄金町4-1-25	15
民謡三絃佐々木孝流滝川支部	岡 嶋 孝 城	有明町5-1-81	15	
太 鼓	滝 川 太 鼓 保 存 会 滝 川 竜 栄 太 鼓	石 坂 繁 夫 中 西 清 一	明神町4-2-33 栄町3-9-21	22
文 芸	文 学 懇 話 会	吉 田 えいじ	大町1-6-30	114
	滝 川 詩 話 会	須 田 五 郎		20
	滝 川 歌 人 会	大 草 清 舟	大町2-1-11	36
	滝 川 作 家 ク ラ ブ	石 黒 白 萩	大町4-1-33	21
	滝 川 川 柳 社 会	相 馬 冬 雨 楼	本町3-2-2	27
壺 俳 句 会	武 内 夕 彦	大町2-1-23	10	
謡 曲	宝 生 会	男 沢 義 久	朝日町西2-1	22
	観 世 会	芳 村 良 元	一の坂町2-1-5	9
華 道 連 合 会	華 道 連 合 会	古 川 と み	一の坂町西3-4-7	148
	池 坊 滝 川 支 部	古 川 と み	一の坂町西3-4-7	16
	松 月 堂 古 流	細 田 恵美子	一の坂町西3-4-39	30
	滝 川 草 月 流 (青松会)	岡 田 律 子	栄町1-14-10	20
	滝 川 小 原 流	岸 本 竹 野	本町6-1-18	37
	池 坊 光 明 流 滝 川 支 部	奥 祥 華	花月町1-3-23	28
	錦 城 古 流	上 西 理 環	一の坂町3-4-21	7
	池 坊 清 月 派	白 木 晶 蘭	大町3-4-5	10
茶	茶 道 連 合 会	北 村 宗 喜	栄町2-4-9	89
	宗偏流 相 川 社 中	相 川 宗 純	大町3-2-3	11

道	玉川遠州流 伊藤社中	伊藤有照	花月町1-7-28	4
	表千家流 岡田社中	岡田律子	栄町1-14-10	11
連 合 会	表千家流 細田社中	細田恵美子	一の坂町西3-4-39	12
	裏千家流 淡交会(和美会)	北村宗喜	栄町2-4-9	15
	裏千家流 上田社中	上田宗輝	本町2-1-13	5
	裏千家流 花尻社中	花尻令子	西町7-4	11
	裏千家流 和交社会	中村宗村	朝日町西1-3-24	9
	滝川橋会	小玉韶鳳	栄町1-12-25	11
日 舞	藤間流 舞踊研究所	佐々木静江	本町2-2-31	20
	寿流 詩舞 舞踊翠会	藤田サナ	西町2-5-22	12
	滝川岳常会	佐藤岳常	旭川在住	21
	婦人会レクリエーション部	荒川八重子	一の坂町東1-5-13	20
洋 舞	久富バレエ研究所	久富淑子	明神町2-5-31	37
	滝川バトントワリングクラブ	桑島守	扇町2-8-24	33
	大場モダンバレエ・スタジオ43	大場道子	札幌在住	17
音 楽	滝川楽友ピアノ教室	福田七之助	緑町4-3-4	16
	婦人会音楽部	神部富美子	栄町3-4-27	25
	青少年吹奏楽協会	村岡芳則	二の坂町114志興寮	37
美 術	全日写連滝川支部	神部弘二	栄町3-4-24	34
	滝川書道連盟	及川泉石	朝日町西3-7	36
	美術協会	坪谷六郎	大町1-2-2	18
	滝川紫山会	関藤ミサヲ	栄町4-5-8	11
	紫山流 川辺社中	川辺乃婦子	一の坂町東3-5-32	12
手 芸	日本手工芸指導者協会	西岡照子	幸町2-14-2	51
	真多呂人形教室	河野トミエ	大町2-4-22グランドハイツ7号	16
	フラワーデザイン武田教室	武田万里子	本町1-2-18	7
	人形作家協会	村山千恵子	大町3-1-7	16
吟 道	桜雲会	中田みさ	東町1-8-30	84
	滝鶯会	丹野雅子	大町4-1	73
	岳風会	斎藤秀希	東町4-7-10	32
	鈴鶯会	前田鶯鈴	栄町2-5-14	18
	霞桜会	香西キク	栄町4-7-3	24
		佐藤鶴子	花月町3-2-25	20
鑑 賞	菊花同好会	赤川一雄	黄金町東2-12-23	26
	動力車菊花秋光会	岩佐幸男	一の坂町東2-6	10
	滝川趣味の盆栽会	榊田広行	北滝の川1169	30
	滝川刀剣会	相田貞弘	大町5-2	14
	自然石趣味の会	高沢清	栄町4-6-23	36
	滝川おやこ劇場	渡辺孝子	東滝川448-13	50
学 術	日本棋院滝川支部	今野正義	幸町2-18	36
	アマチュア無線クラブ	山口真彰		96
	読書をすすめる会	武田せい	本町2-2-18	48
	話し方研究会	花摘誠吉	栄町2-3-20	20
演劇	青少年演劇研究会	田口孝太郎	緑町4-3-8	14

16部門 81団体 1,872人



「手古奈」の上演

はま児 松浦律子 行磨 佐藤頼保 くず人 梅木英明 家来 川崎四郎
 鈴石 高橋鉄治 鹿丸 浜野喜孝 トレーナー 松浦・熊沢・石山
 合唱 横山・高橋 ソリスト 横山・加地 伴奏 加地

江部乙文化団体協議会 昭和二十八年六月四日の創立まで、十指を超える単位団体があり、個々の活動をしていたので、広く住民とのつながりに乏しく、発表会、展示会、又は加入などにも充分な働きかけができず、住民全体への文化普及の向上促進、単位団体の活動発展にも、今一つ何か欠けている状況であった。

ここにおいて、各団体間の緊密な連絡協調を図り、個々又は総合的な各種行事を通じて、町全体の文化普及向上に努めることを目的とし、「文団協」が設立されたのである。

この目的を達成するため、必要に応じ連絡協議会を開催したり、研究会、発表会、講習会等総合的文化行事を実施、また、各団体に

において単独に行う事業についても連絡を保ちつつ実施することとした。さらに、文化祭行事には全面的な協力をすることにした。

その後、毎年各団体の事業計画を持ち寄り、連携強化を図ってきたが、昭和四十年十月、従前の文団協規約を一部改正し、より一層の団結強化を期し、推進事業の充実を図る方針を定め、役員体制の強化を行い、単位団体にあっても同種の会が合併し、着実な活動を展開するよう、その醸成に努めてきた。

機関誌として、昭和四十一年「文団協」を発売、文団協の創立趣旨の理解を求めると共に、各団体の活動状況啓発普及に努めたのが初まりで、現在まで毎年一回発行し、第七号(昭和四四年)機関誌名を「ゆうべおっと」と改称した。

昭和四十九年には、二十周年記念特集号を出し、五十二年の第一二号には「古老尋ね歩き」をはじめとし、屯田開拓による生々しい当時の苦心談、状況などはもちろん、豊富な内容は郷土文化誌となり第一三号の「江部乙の古跡、昔話特集」など、どの頁をあけても愛郷の念と、ややもすればうすれがちな伝承と探究の熱情が溢れている。

江部乙町文化団体協議会

歴代会長 吉田 恵 昭和三〇・六
 〇三・〇 早弓 房松 昭和三三・〇
 〇五現在

単位団体―結成順― 印は途中解散・合併団体 ―昭和五二年現在―

団 体 名	代 表 者	区 分	会 員 数	発 足 当 時 団 体 名	結 成 年 月 日	合 併 解 散
江部乙短歌連	河原 正雄	短歌	三四	短歌紀元江部乙	大正三・四	
江部乙宝生会	岩佐 職司	歌	一二	江部乙節南会	昭和二三	

研江部 究乙華 会道	大崎つる多華 道一〇〇華	山本 弘子華 道一〇〇華	榎谷美枝子俳 句二〇九	青木 修短 歌三・一	千嶋圭二郎修 禮三・三	山本 はつ華 道三・五	手嶋圭二郎茶 道三・六	森本 幹夫音 樂三・一〇	手嶋 双勢邦 樂三・一〇	手嶋圭二郎観 劇三・四	林 昌司絵 画三・二	早弓 房松菊 花三・二	吉田 恵舞 三・三	白石 正男美術 写真三・四	伊藤佐智子華 道三・五	泉田 正夫写 真三・七	岩佐 職司盆 裁三・〇	嘉見 光義書 道三・八	藤浦 徳明各種 音楽三・〇	森本 文子生活 作文三・〇	横山 守俳 句三・九	太田 吉一詩 吟三・四	山越 正吉民 謡三・三	洪谷 和子舞 踊一〇
遊 塵 会	華 道	華 道	江 部 乙 書 道 連 盟	江 部 乙 書 道 連 盟	江 部 乙 書 道 連 盟	江 部 乙 書 道 連 盟	江 部 乙 書 道 連 盟	江 部 乙 書 道 連 盟	江 部 乙 書 道 連 盟	江 部 乙 書 道 連 盟	江 部 乙 書 道 連 盟	江 部 乙 書 道 連 盟	江 部 乙 書 道 連 盟	江 部 乙 書 道 連 盟	江 部 乙 書 道 連 盟	江 部 乙 書 道 連 盟	江 部 乙 書 道 連 盟	江 部 乙 書 道 連 盟	江 部 乙 書 道 連 盟	江 部 乙 書 道 連 盟	江 部 乙 書 道 連 盟	江 部 乙 書 道 連 盟	江 部 乙 書 道 連 盟	江 部 乙 書 道 連 盟
研江部 究乙華 会道	大崎つる多華 道一〇〇華	山本 弘子華 道一〇〇華	榎谷美枝子俳 句二〇九	青木 修短 歌三・一	千嶋圭二郎修 禮三・三	山本 はつ華 道三・五	手嶋圭二郎茶 道三・六	森本 幹夫音 樂三・一〇	手嶋 双勢邦 樂三・一〇	手嶋圭二郎観 劇三・四	林 昌司絵 画三・二	早弓 房松菊 花三・二	吉田 恵舞 三・三	白石 正男美術 写真三・四	伊藤佐智子華 道三・五	泉田 正夫写 真三・七	岩佐 職司盆 裁三・〇	嘉見 光義書 道三・八	藤浦 徳明各種 音楽三・〇	森本 文子生活 作文三・〇	横山 守俳 句三・九	太田 吉一詩 吟三・四	山越 正吉民 謡三・三	洪谷 和子舞 踊一〇

各種単位団体の沿革概要

◎江部乙宝生会 大正十二年医師根守秀夫が、一〇人ほどに指導したが間もなく消滅、昭和二年医師野村巖來村、謡曲の普及に努め、岩佐職司外二〇名が指導を受け盛会であった。その後、野村医師の死亡により深川より藤岡勘平、札幌より後藤良彦を招へい教授を受けたが兩人とも故人となり、運営は低調となつていった。岩佐職司は熱心に精進を続け、昭和四十五年宗匠家元より囑託教師の免状を受け、謡曲、仕舞の普及に精力的な努力をしているが、現代はこうした古芸術に対する理解が乏しく、後継者の養成には幾多の困難がある。

歴代会長 岩佐 職司(創設より現在まで)

◎江部乙短歌連盟 江部乙の短歌文学は明治の後期からであるが、団体の形成されたのは大正末期である。昭和三年には川柳鋭光社を設立、同六年短歌紀元江部乙支社を設立、同三十二年には江部乙短歌会を設立、三十九年江部乙短歌連盟と改称し現在に至っている。刊行物として昭和二十三年合同歌集「やわらぎ」翌二十四年同じく「雪」、三十二年機関誌「江部乙短歌」編集、四十一年合同歌集「土」創刊第三集まで刊行、協力しあい精力的活動を進めている。

歴代会長 河原 正雄(創設より現在まで)

◎江部乙菊花秋香会 江部乙の菊作りには四十有余年の歴史がある。

当初小杉善之助、岩橋喜代松等が熱心に普及につとめたが、戦争が熾烈となつた昭和十八年ごろから一時中断した。

いる。

昭和四十八年には第二四回目の発表会を開催している。また発表会には地元並びに近隣市町より各種団体を招へいし、多彩なプログラムで地方の音楽文化の振興に尽くし好評を博している。なお定例練習会は毎週一回を確保している。

主宰者 森本 幹夫

◎土筆会(絵画) 昭和二十五年、一木万寿三が本町に在在中、日曜美術教室を開設し絵画の指導に熱意を傾け、画伯に師事する者多数にのぼり盛会を極めた。

昭和三十五年画伯が札幌へ進出してから指導者を失い中断されてしまった。文団協としても加盟団体に絵画のない寂しさから、斯道の普及に努力したが、なかなか芽生えなかった。

昭和四十七年ごろより、かつて一木画伯の教えを受けた林昌司が中心となり愛好者に呼びかけ、翌四十八年四月画伯の遺した「土筆会」の再興を見たのである。その後、研究会、文化祭の展覧会開催など、活発な活動が始まり、今後の発展が大きく期待されている。

役員 創始 一木万寿三 現在 林 昌司

◎江部乙カメラクラブ 本町における写真の歴史は大正十三年頃、根守秀夫、岩佐職司等でsk写真クラブを作り活躍したが、途中で自然消滅した。

その後、江部乙文団協設立と同時に、カメラクラブが同好者により結成今日に至っている。行事は研究会、撮影会、作品批判会、作品発表会、毎年の文化祭には作品展示会を開催、技術の向上に努め

ている。

歴代会長

一木 善二 昭和六、岩田 武次 昭和五、安田 敏夫 昭和六
増永 栄作 〃 三、木下 智 〃 四、泉田 正夫 〃 五

◎百葉会(盆栽) 近年盆栽の栽培は各地で盛んであるが、当町においても愛好家が増加、平野庄一、村井久一ほか同好者等が発起して本会が結成され、会員も年々ふえて盛会を極めている。

年中行事としては、盆栽栽培研究会、研修旅行、見学会などを行ない培養技術の向上に努めている。

なお、毎年秋一回盆栽展示会を開催し、会員自慢の各種盆栽が百五十余点展示され参観者を楽ませる。

歴代会長

平野 庄一、山本 栄、佐々木徳次郎、北森 正雄、岩佐 職司

◎演劇観賞協会 昭和三十年手嶋圭二郎、西川福太郎等が「木曜会」を設立したのが本会の動機となった。

本協会の設立は手嶋圭二郎ほか三〇人の同好者と青年団長、婦人会長の参加を得て発足した。

その後、昭和三十四年新制作座、児童劇団風の子、三十五年から三十八年まで新制作座、三十九年から四十七年まで毎年風の子、又はほうねん座、四十七、四十八年前進座の「親らん」公演を後援する。最初は観客の動員で心配されたが、回を重ねる毎に観客層が定着し、より高い文化的舞台芸術の普及に貢献している。

会長 手嶋圭二郎(昭和三十四年創設以来現在まで)

◎江部乙書道愛好会 江部乙には早くから書道愛好家が多かったが

流派が六派位で他派との交流はなく自派の殻に閉じこもっていた。昭和三十五年十月、この弊害を破り普遍的書道の研究と技術の向上をはかるうと、松田弥兵衛ほか一〇名の同志が集まり、書道愛好会が結成された。

特に、旭川市雪嶺書道菅原秀雪の指導を受け、その後は上田桑鳩、少覚史山、東志青村、畑中篁舟、斉藤露石の諸師を招へい、技術も著しく向上、各地の書道展に入選する会員も数多い。また、毎年、文化祭には作品展を開催、書道の普及と振興に努めている。

歴代会長

初代 松田弥兵衛 昭和三 二代 嘉見 光義 昭和四〇〜現在

◎ひろばの会（生活作文） 昭和三十五年十月に創設、毎月学習会を開催して研修し、年二回文集を発行している。北海道えんぴつを握る母の会に加入、母親大会、母と女教師の集い、全道作文教育研究大会、NHK婦人学級、全道婦人会議等に参加し、現代婦人の地位向上と教養を高めるために活動の展開をしている。

歴代会長

岩佐 俊子 昭和三、井上 寿子 昭和四、湯浅 茂子 昭和四
菅原 とみ 昭和四、森本 文子 昭和四、中村 洋子 昭和四
森本 文子 昭和四
森本 文子 昭和四

◎江部乙音楽協会 町内各種音楽団体の活発な進展に伴ない、各団体代表者との交流を図り、特に文化祭に行われる「全町音楽交換会」の企画、運営、開催を円滑に進めるために設立された。

また、それまでは各種招へい音楽会（例えば高木東六、宮沢明子ピアノリサイタル）京都大、武蔵野音大、明治大、日本大等のオーケストラ

及びアンサンブルの主催は町音楽サークル（小・中音楽研究会）でなされたが、全町的な組織で幅広く実施したい意図もあって結成されたのである。

全町音楽会の種目は声楽（独唱・合唱）・器楽（独奏・合奏）・邦楽・民謡・詩吟・パレーなどで、理事は次の代表者によって構成されている。町音楽サークル委員長、游塵会邦楽部、たんぼほ音楽会、民謡研究会、パレー研究会、詩吟道場、グリーン・アンサンブル、舞踊会、その他。

歴代会長

森本 幹夫（昭和六） 松浦 欣也（昭和四） 浅木 倉平（昭和四）
林 弘幸（昭和五） 藤浦 徳明（昭和五）

◎紫山会「造景美術」 昭和四十一年四月一日に創設、当初は幾多の困難に遭遇したが、役員の熱意によつてしだいに会員も増加し、会の基礎も確立し、力強い活動を展開、毎年、文化祭には作品展を開催、その美しさは参観者を驚嘆させている。会員は毎月研究会を開き技術の向上に努め、また見学会等も行っている。

歴代会長

松村 朝子 昭和四、野田ハッイ 昭和四、土川寿満恵 昭和四

・江部乙詩吟道場 昭和四十三年四月、日本詩吟学院岳風会深川支部江部乙道場として発足、当時は会員一八名であったが、次第に増加し盛会となる。毎週火曜日を練習日と定め、熱心な研鑽が続けられている。

年間行事としては、三回の審査、支部大会及び文化祭行事の参加

老人クラブの慰問等を行っている。

会長 太田 吉一（創立以来）

◎江部乙民謡研究会 昭和四十四年に三味線練習を開始、東元好子他数名が修得、同四十五年江部乙文団協、空知民謡会に入会、春祭り招魂祭に出演、老人ホーム、交通安全神社、江部乙神社祭典、盆踊り、勤労感謝祭等の諸行事に出演、また滝川市歩行者天国の応援出演するなど幅広い活動を展開している。

なお会員は各地の民謡大会に出演し、優勝をするなど、また、春秋二回発表会を開催、町民に多大な感銘を与えている。

創立 昭和四十三年十二月

歴代会長 山越正吉

◎北辰校音楽隊 明治四十年三月、卒業式あとに行われた緊急同窓会で紙谷義一の発議により、子供の音楽隊を作ろうということになり、屯田の両中隊全部に寄付をおおぐこととなった。

募金は意外なほど反響を呼び、③小杉酒保、④石丸酒保などは、目標額以上の寄付で予定を上まわるほどの額である。

当時、東京銀座に十字屋という楽器店があり、その店に楽器を注文、大太鼓、小太鼓、シンバル、クラリネット、コルネット、テナー、アルト、バスバリトンなどが受け渡たされ、その年の初秋には早くも練習にかかれるようになった。

練習については、札幌音楽会から齊藤嘉一郎という人が来て、毎夜学校で練習し、照井校長も在任中でよく来て督促していた。

最初の練習曲は「逝去の友」という小曲、二番目は「遠洋漁業」で、皆が卒業生であるのと好きで集まった者ばかりで上達もすばら

しかった。これが北辰小学校同窓会音楽隊の始まりである。

◎北辰中学校オーケストラ PTA役員の尽力と多くの人々の善意に満ちた寄付、江部乙音楽の先駆者森本幹夫ほか同僚たちの応援、励まし、協力、そんな多くの暖かい目に囲まれ、松浦欣也と生徒との勝負が始まった。この生徒たちが何と物凄い、しごいてもしごいても食らいついてくる。朝は六時ごろから集まり、夜も七時、八時と遅くまでの猛練習。もちろん、夏、冬休みも休まず練習を続けた。

昭和三十六年度から四十二年度までに、NHK合奏コンクールで計六回の北海道優勝、うち三回は全国で二位、三位、四位の好成績をおさめた。

コンクールの予選で一度だけ滝川江陵中にやぶれたことがある。その時の江陵中の指導者が兄の松浦真であった。全く皮肉なものであると、松浦欣也は往時をしのび、ポツとひとりごとをいう。

ふるさとの歌 (江部乙)

えべおつかっぼれ

森本幹夫 作詞
作曲

Moderato はずませて

(歌) 1~2. ハア - えべ - おつ - よいと こーみんなで
お - どり - (りんごはななくつつみの
しごとあいまにげんかん
どで) サ-ツサッサノ ヨイトナ (あのごえ
あつても
このこえ) なつかしい えべおつかっぼれ
きはすむ (なかよしこのし) ヤッコラサノ
サ ソレチョイト ひとおどり

江部乙小唄

前田忠次 作詞
森本幹夫 作曲

はずませて

(歌) 1. はるのかぜふきや
2. なつはほのぼの
こおりもとけ---て にりとしほうの
かすみにあけ---て むらのれきしに
にりとしほうののや---まは---めぶ
むらのれきしにかお---りも---たか
く そらちへい---やのはるだ---ものほんに
いそだいいりん---のはなが---さく
えべおつ よいとこ---ろ

江部乙小唄

- 一、春の風吹きや 氷もとけて
二里と四方の 野山は芽吹く
空知平野の春じやもの
ほんに江部乙よいところ
- 二、夏はほのぼの 霞に明けて
村の歴史に 芳りも高い
名代りんごの花が咲く
ほんに江部乙よいところ
- 三、秋の田圃にや 稲穂がなびく
なびく筈だよ ちよいと見ておくれ
村の乙女はきりようよし
ほんに江部乙よいところ
- 四、一夜泊りの いでゆの客も
明けて鳥の 啼く声きけば
ほろり思案をするそらな
ほんに江部乙よいところ

※昭和12年作。当時はNHKから放送されたり、のど自慢で歌われたり、あらゆる会合や、また学校などでよく歌われ、年輩の方には懐かしい思い出の曲である。

お月さんもしもだよ

曲線立歩 作詞
森本幹夫 作曲

Moderato (♩ = 92 位)

1〜2. お おい おつきさん もしもだ---よ
 あなたのかけに ひっそりと ひらいた花はな---が
 あったなら たとえもだえていようとも
 りょうてをひろげて りょうてをひろげて
 こころゆくまで さちかせて---よ

一、おおい お月さん

もしもだよ
 あなたの影に ひっそりと
 ひらいた 花が
 あったなら
 たとえ もだえて
 いようと
 両手をひろげて
 こころゆくまで 咲かせてよ

二、おおい お月さん

もしもだよ
 貴方の影に ひっそりと
 散って 花が
 あったなら
 たとえ 佗びしく
 見えようと
 両手をひろげて
 こころゆくまで 散らせてよ

※町文団協会の要望で、年輩の方々のための歌謡曲として、演歌調のもの。昭和43年、新年総会で発表された。

みんなの町

嘉見光義 作詞
森本幹夫 作曲

♩ = 120 明るくマーチのはやさで

か れん な し ろ い は な び ら に
 つ ゆ の し ず が ひ か ー と き
 り ん ご の お か ー に あ き ー が く る
 こ ん な あ か る い ふ る ー さ と に
 み ー ん な て を と り わ に な っ て
 ぶ ん か の は な を ・ さ か ー せ よ う

みんなの町

一、かれんな白い花びらに
 つゆの雫が 光るとき
 りんごの丘に 朝がくる
 こんな明るいふるさとに
 みんな手をとり輪になって
 文化の花を咲かせよう

二、明るい陽ざしにふくらんだ
 みどりの風の そよぐ窓
 愛のチャイムは流れる
 こんな平和なふるさとに
 みんな手をとり輪になって
 文化の歌を うたおうよ

三、ピンネの峰の夕映えに
 黄昏ひそと 迫るとき
 石狩渡る 川風よ
 こんな静かな ふるさとに
 みんな手をとり輪になって
 文化の灯かかげよう

※「おとも子どもも、気軽にどこでも歌えるえべおつのホームソングがほしい……」と、文団協会の要望で、昭和43年に作られた。

第二節 趣味・芸能

華道 明治三十五年ごろ、楓通り三丁目（今の栄町）の自宅

で山本タツが、華道利休流を始め、門弟十名内外をもっていたが、昭和十年死亡、山本ソデ、岡崎田鶴子がその後を継承した。

また、大正三年ごろ、幌内から土屋辰治を招き前山徳太郎、杉本文吉を中心として新谷早苗、山田九一、河内平次郎、鈴木市太郎、田中重助、広部伊織、高畑雄五郎、斉藤孫吉、武田シンなどが、同志的会合を続け、昭和十年ごろ松月堂古流全盛期の師範職とし活躍したが男性の多いことが特色として挙げられる。

昭和四年、滝川高等女学校が設置され、華道教授として杉本文吉が囑託され、次いで山田九一がこれを継ぎ、昭和三十年ごろまで生徒の指導に当たった。

大正五年、岩見沢町から沢枝玉枝が出張授業を始め、この地に池の坊の普及をみ、広部ヒデ、大竹幸子、山田ハル、神部東枝、相川某、三浦美代、根井タカ、近藤キネオ、浅田キタ、横山シゲを中心、昭和二十年ごろまで教授者として活躍している。

大正十年砂川から井高いそが出張教授を始め、土井某、寒河江文尾、杉浦某、遠藤サト、石渡カツ江、杉井トク子、山根喜作、渡辺春吉らの教授者を養成しこの流派発展の基礎を築いた。また三浦ユミが一の坂で大正末期から昭和初期にかけて指導をしている。

昭和十六年、池の坊華道会北空知支部を結成し、浅田キタを初代

支部長に推し、今日の「華道会滝川支部」の隆昌をみるに至ったのである。

小原流家元教授本間如照は、昭和二十三年新十津川村から移住、自宅で門弟の指導を始め、それ以来年と共に盛んになり小原流風国会空知支部を結成した。当市では須藤照嶺、尾崎照枝らが師範とし活動をしていた。

盤景 昭和八年ごろより盤景の師範佐川ウサが当町に出張教授をしていたのが、盤景紫山流の始まりで、当時杉村哲子、武田セイ、近藤キネオ、北川キク等が指導を受けていた。

昭和十一年滝川支部を設け杉村哲子が支部長となりその普及に努めたが、戦争がしだいに烈しくなるにつれ中断された。

謡曲 宝生流の滝川における始祖は野村巖で、野村は大正四年、帯広から転居の折、玉置里見に頼まれ私立滝川病院に勤務することになり、大正五年ごろから同好の志、寒河江巧、森田亀治、根井仁太郎等と練習を始めた。野村が去った後、寒河江は医業の余暇、西尾英太郎、横山仁平次、角五衛、亀屋虎蔵、神部東枝らと練習を続けていたが、その指導を受けたものは百数十名に及ぶであらう。

寒河江はその奥伝をきわめ、宝生流宗家九郎の囑託となり、この道の普及に尽力、また、杉村定計、杉村哲子は旭川市斉藤清子師範について学び師範の技倆を得ている。

滝川の観世会は、市の草分けである高畑利宜が、明治二十一年駒通をつくり当地におち着き、趣味として観世流謡曲をよくした。

明治四十年ごろ、この道を楽しむ染谷喜久吉、奥井直吉、門山周通、深沢四郎らの同好者と観世会をつくった。その後更に鈴木鴻、神部為蔵、神部東枝、小華和貞男らも加わって、しだいに隆昌の機運に向かい、大正の初め高畑雄五郎により一層会を盛りあげ、大正二年から七年ごろまで札幌市在住の観世麗治(後に改名して観世真弘)を滝川に招き、月一回の練習会を催すなどして同好者が五〇名を超えるまでになった。

しかし、昭和に入ってからやや低調となり、ときおり会を催す程度となり、殊に戦時体制になってから全く途絶えて終戦となった。

終戦後、この道の再興をめざして高畑雄五郎、山本庵らによって初心者指導を始めたが、昭和二十一年十月に山本庵、同二十四年高畑雄五郎が死亡、高畑宜雄が観世会長を嗣ぎ、週一回同好者によりこの道を楽しんでいる。会員数は三〇名ぐらいであった。

このほか、昭和三十年から駅長山本広治が師匠となって、駅員二〇名ほどを指導していたが、三十三年駅長の転勤と共に立ち消えとなった。また、滝川家政学院内音楽センターで、観世流謡曲科が設けられ中森重雄が指導に当たっていた。

舞 踊 滝川藤間流日本舞踊研究所は、昭和九年四月一日、佐々木舞踊研究所として発足し、佐々木静江が指導に当たっていた。

佐々木静江は札幌市藤間勘雪に師事し、師の亡きあとは藤間雪千代に師事して研究を重ねていた。終戦後東京に出て赤坂区溜池の藤間勘太郎についてさらに研究を積み、ついに昭和二十八年五月二十八日、家元藤間勘右衛門、尾上松緑からの名取免許状を授与され、

それ以来藤間勘太哥の芸名で指導、昭和三十一年四月、藤間流日本舞踊研究所と改称今日に及んでいる。滝川市内はもちろん近隣に出張所を設けて指導し、情操豊かな人がらをつくり、人格の向上に努めると共に体位の向上に心を傾けている。藤間太哥智代、藤間太哥由喜、藤間太哥恵、藤間太哥洋をはじめ、その指導を受けているものは多い。昭和二十八年十一月三日、滝川町文化奨励賞を受けている。また、昭和二十一年から、東流舞踊を通して文化の向上に寄与しようと弟子をとって、指導に当たっていた東昶吉は、多年にわたる功労を認められ、昭和三十年十一月三日、滝川町文化奨励賞を授与された。

東昶吉の死去後、東昶鈴(鈴木時子)がその後を継いで「東流昶鈴会」と改称し、この道の指導につとめていた。

舞踊花柳流は大正末期、花柳徳文によって花柳流徳実会が創立されたもので、北海道地方の花柳流舞踊の普及を目的とし、昭和二十五年花柳徳文乃が二代目を引継ぎ砂川市日の出町から出張指導に当たっており、花柳徳文杏、花柳文乃富、花柳英持、花柳左貴乃らがその流れを伝えている。

終戦後、バレエが流行して来た。滝川にも昭和二十七年六月、内山玲子の来町を機会にバレエ研究所を作ろうと、浜中俊輔、武田セイラの奔走で滝川バレエ研究所が誕生した。

将 棋 滝川の将棋はその昔、五十嵐太郎吉などが熱心な棋士であった。昭和八年に丹野俊次郎が宮城県から移住し、伊藤、大竹、亀屋、越中屋、本田、中田ら同好の士が会して大いに棋を練

り、将棋滝川の名を近隣にとどろかせた。

昭和十年滝川棋友会が誕生し、大竹竹蔵を会長に推し丹野俊次郎、伊藤貞一、亀屋、吉田らの有段者がおり、将棋会はますます隆昌をみ、旭川、岩見沢、砂川などの支部對抗試合には、いつも優勝したものである。昭和十五年には人造石油会社ができ、人石には荒川、鈴木、日置らの有段者がいて、滝川の将棋会は盛んであった。

また、日本棋院の木村義雄名人、花田八段、渡辺八段、大山名人、丸田八段、五十嵐八段ら多数の専門棋士を招いて棋道発展に努めた。

昭和十八年棋友会は日本将棋連盟に加盟し、日本将棋連盟滝川支部となり、有段者も多く優秀な戦績を残している。

歴代会長 初代 大竹竹蔵、二代 伊藤貞一、三代 鈴木猛市

囲碁 囲碁は滝川開基当初から娯楽として個々の間で行われていたが、明治四十年代から森太郎人、山崎庸哉、奥井直吉、細越政右エ門、大正から昭和初期に本山鹿太郎、加賀井弥市、長井慶治、竹越久寿、広部弥助、斉藤数雄、内田三之助、佐々木種彦らが相当な実力を持っていた。

昭和十年ごろに囲碁同好会ができ、佐藤勘次郎を会長とし年一、二回碁会が続けられていたようである。昭和二十三年綿谷幸太郎は初段を免許され滝川囲碁会の発展に尽力した。昭和三十五年一月十四日、日本棋院滝川支部を結成、囲碁研究を通して親睦融和が図られ、五十四年現在市内の最高位は上林義光六段で全道的に屈指であり、五段以下高段者の層も厚くなり、囲碁人口の増加を見せている。

美術 昭和二十二年ころ市内末広町（現本町）に住んでいた菊地秀二が、一水会会員でアトリエを持ち、洋画に精進していたが、昭和二十六年ころ上京した。

昭和二十九年四月、同好者一木万寿三夫妻、坪谷六郎、越沢満、塚田進、長田節子、山川義夫、林正司、斉藤恭子等九名が、滝川ドレスメーカー女学院教室に集合、美術同好会を結成、一木万寿三の発案によって「黄土会」と称し、美術活動を推進し美術思想の普及発達をはかった。同年十一月三日文化の日を選んで、第一回展覧会を第一小学校で開催、出品点数は約四十点であった。

昭和三十年、真柄修一、松田禎夫、梅沢馨、織田文子、白鳥友二郎らが入会、この年から定期的に会費を徴収し、月二回のデッサン会を開き、会員相互の技術や芸術論に修練を積んだ。その後、一木夫妻やその他会員の他に転出するものが続き、現在はずか数名にとどまるに過ぎない。

昭和三十七年坪谷六郎、同三十九年真柄修一が道展会員に推挙され、同四十一年に真柄は一水会員となり、同四十五年古村勝新道展会員に推挙されている。なお、道展に入賞する者も多くなった。

写真 真 昭和二十三年八月、神部弘二、高田穰らが中心となり、同好者により、新十津川町川合弘起を指導者とする空知写真倶楽部が結成された。

同二十六年、神部弘二を会長に、全日本写真連盟滝川支部を設置した。

近年、アマチュア写真が激増し、写真技術も急速な進歩を見るに

至り、毎年の文化祭には出品多数で写真展を賑わせ、春秋には写真撮影会を開き技を競っている。国際サロンをはじめとして全日本写真サロン、富士写真コンテスト、道展、北海道サロン等に、会長はじめ会員の作品を出品、多数入賞の栄をかち得ている。

書道 昭和十一年、少覚納（史史）が御手洗書道会を第二小学校に創立したが、昭和十五年から終戦まで、会長応召のため閉鎖していた。戦後再び活動を開始し「墨仙書道会」と改称、少覚を中心に山田青畝、永田青雲、東志青村、山本史江が指導者となり青少年会員の指導に当たっており、毎年正月、三月、十一月に書道展を開催、時に個展を開催しているほか、上田桑鳩、桑原翠邦を招き講習会を開催している。

昭和三十四年十一月一日、滝川高校教諭畑中順太郎（篁舟）を中心とし、高校生及び一般の斯道愛好者によって土筆会が結成され、畑中篁舟、寺島鶴水が指導にあたり、文化祭、卒業式に展覧会を開き書道の興隆に努力している。

なおその後、昭和三十七年十月には斉藤露石による斉藤書芸社、同四十四年十月には、畑中篁舟による滝川書道連盟が設立された。

音楽 昭和五年鈴木善治を中心に、この道の愛好者たち二十余名によって「滝川ハーモニカバンド」が結成され、東京から川口章吾を迎え、初めて発表演奏会を開いた。それ以来随時集合し練習しこれを楽しんでいた。

昭和八年、滝川音楽協会と改称し和久井重一を指導者に迎え、ハーモニカを中心とする新しい編成に作り変え同志もしいに増加

し、同十三年新谷早苗が会長となり、NHK札幌放送局より初放送をし大いに宣伝された。昭和十四年札幌及び旭川両放送局から再放送し、日赤旭川病院で演奏会を開催、翌十五年滝川劇場で北海道歌の発表演奏会、またNHK札幌放送局から放送、札幌丸井記念館で演奏会を開催し、昭和十六年NHK旭川放送局から放送、旭川、定山溪、月寒、層雲峡、登別各陸軍病院慰問演奏をするなど大いに活躍したが、同志の多くが次々応召し、しばし中止のやむなきに至った。

昭和二十二年、滝川管弦楽団と改称、新しく編成、昭和二十五年十一月三日、鈴木善治、翌二十六年は滝川管弦楽団、昭和三十二年に木原義雄、三十四年には神原英貞が滝川町文化奨励賞を受賞した。

また、昭和三十五年の朝日新聞に熱心な研究団体として天下に紹介され大いに面目を施し、その実力技倆の面はもちろん、その熱心さにおいても滝川の誇りの一つとすべきものと思われる。

昭和三十四年十月、「ヤマハオルガン教室」が小中学校児童生徒を対象として中川文潮堂で発足した。日本楽器ヤマハ楽器代理店として依頼されて始めたもので、福田聡、村木悠子が指導に当たった。

また、同時に文潮堂では「ピアノ教室」を併置小中高校生希望者の指導が始まり、三十五年五月一日「ヤマハ音楽教室滝川会場」と改称、幼児科、児童科を置き各二カ年の練習期限を設け、幼児科は滝川幼稚園を会場に練習していた。

昭和三十五年九月一日、「滝川音楽センター」が結成設立された。これは、戦後ラジオ、テレビの普及によって音楽は驚異的な発達を

したが、ややもすれば正しい音楽からかけ離れた流行歌的音曲にはしる傾向が現れたので、正しい音楽的趣味を青少年層に普及培養に努め明るい社会建設を目指してのものであった。

指導者は、音楽理論奈良勝博・松浦真、音楽科松浦欣也、ギター科木原義春、オルガン・ピアノ科五十嵐真理・森本義雄、声楽科奈良みち・中森由紀子、謡曲科菊地知・高畑宜雄・中森重雄で、会長は松田新之助であった。

昭和三十三年四月一日、福田聡の個人経営で「滝川楽友ピアノ教室」が開設、ヤマハ教室を終わった小中高校生及びピアノ愛好者一般を指導し、毎年一回発表演奏会を開いており、四十五年九月には国際的名ピアニスト宮沢明子ピアノリサイタルを、市民会館で開催している。

昭和二十八年九月、木原義春は写真館スタジオの一室に、児童の絵画と音楽の教室を開設し、三十年の文化祭にはバイオリンの演奏を発表した。その後、芸能祭参加、慰問演奏、発表演奏、HBCテレビ出演など活発な活動を展開、昭和三十五年一月滝川児童楽器研究所を「滝川バイオリン研究所」と改称、同年八月滝川市開基七〇周年記念第三回発表演奏会、同年十一月NHKテレビに出演した。

昭和二十四年九月、一の坂の白滝荘で、元人造石油会社の婦人達が主となって、混迷した世相の中で若い人々の心に喜びと潤いを持ち美しい歌、きれいなハーモニーを与えようとして発足したものがあった。その後、昭和二十七年滝川化学が破産し、建物解体中の松庫商事浅野秋夫が中心になり、指導者に松浦真を迎え、「白滝合唱

団」と命名、行事としては不定期にレコードコンサートの開催、二十九年八月NHK「私たちの合唱」の時間に放送、昭和三十三年六月市制施行行事に「市制施行讃歌」を公開、三十四年には、創立十周年記念発表会を開催、また毎年文化祭出場をしてきた。

昭和三十四年十一月、滝川電報電話局職員の組合活動の一環として小松利三を代表者、西小持田勇を指導者に同好会員としたコーラスサークルが誕生、名称も「滝川電通歌声コーラス」といった。

昭和四十二年四月に設立の「滝川市婦人会音楽部」は、発足以来その活躍も目ざましく、各種大会に出演、昭和四十四年七月、HBCテレビ「奥様スタジオ」、同年十一月、NHKテレビ「音楽の広場」、四十五年十二月、NHKのど自慢出演全国放送、昭和四十七年四月、HBCテレビモーニングジャンボ出演、四十九年七月、UHBCテレビ「フライデー奥さん」に出演、テレビによる発表もまた素晴らしいものがある。

昭和四十六年四月設立の「滝川市青少年吹奏楽団」は、札幌で行なわれる北海道吹奏楽コンクールに、四十六年以降毎年出場、初回は「銀賞」四十七年「銅賞」四十八、九年は「金賞」五十、五十一年は「銀賞」と好成绩を示し、全道吹奏楽でその名を輝かしている。

また、昭和四十九年四月のNHKテレビ「音楽の広場」に出演好評を博した。

詩 吟 昭和三十五年六月、滝川市招魂祭の当日、越沢三

郎が札幌市旭昭流詩吟師範芝崎旭峯を招へいし、忠魂碑前にて奉納吟詠を行った。「英霊還故山」「噫々硫黄島」の二詩で、遺族を始

め来賓有志多数に多大の感銘を与えた。

その後、越沢三郎、川越クニエを中心に同好者を集め、同年六月末「滝川吟詠会」を結成し、毎週芝崎旭峯の指導を受けることになった。

やがて、吟詠が急速に広まり市内には、桜雲会、滝鶯会、岳風会、鈴鶯会、泉桜会、霞桜会が設立され盛会である。

また、これらの中には、昭和四十年九月、日本吟詠連盟全道コンクール競吟、個人優勝丹野鶯園(雅子)、同五十年六月クラウンレコード全国大会北海道地区大会で優勝、全国大会出場の酒井悠鶯(愛子)などの名が挙げられる。

民 謡 滝川民謡研究会の創始者竹村与作(竜正)は、明治二十二年五月三十日富山県に生まれ、明治二十六年三月渡道、栗沢、角田、沼田に転住、大正三年四月から小樽山崎竜月に師事して奥義を極め、大正五年四月講師の免許状と竜正の号名を受けた。

大正十二年七月二十四日、滝川町に転住し、食堂経営の傍ら同好者を集め「滝川美音会」を結成し、会員三十余名と民謡の練習を始め、それ以来毎週一、二回の練習を続けてきたが、昭和十七年戦争が激しくなると共に一時中断した。

昭和二十四年九月、再会し会名を「滝川民謡研究会」と改め、続いて二十五年十月、北海道中部民謡代表者の参集を求め「北海道中部民謡連合会」を結成、その初代会長に推された(二代赤平高松豊弘、三代深川竹岡亀寿)。参加二七カ町村、会員六百余名という盛況であった。

昭和三十四年一月、会長を辞し、顧問兼審査委員長となったが、その後これも辞して滝川民謡研究会の講師として、後進の育成に精進した。

昭和三十四年三月二十九日、市の民謡愛好者が市民会館で民謡発表会を開催したが、これが動機となって「滝川民謡振興会」を結成しようということになった。

しかし、ちょうど各種選挙が行われたため、一時保留され、九月二日、滝川消防第二分団番屋で結成され、滝川民謡振興会の発足をみるに至った。

昭和三十五年十二月二日、セントラル劇場で、第一回滝川市民謡振興会発表並びに素人のど自慢大会を開催したが、民謡、浪曲、舞踊などに会員四十余名が出場、民謡、歌謡には近接町村から十数名が出場、会場には八百余名の入場者があって盛会であった。

その後、昭和四十一年四月滝川民謡連合会が発足、現在では滝川民謡隆城会、振興会、晴友会、研究会、鵬生会、竜正会、吟栄会、新生会などが、それぞれ技能の陶冶と発展向上につとめ親睦を深めている。

昭和三十六年から五十二年までの各支部の業績を見ると、優勝・準優勝の域にあるものとして、空知地区民謡連合会競演大会北海道民謡の部には、又村錦星、寺内城月、川野暁香、伊藤錦城、相模湖陽、佐藤湖葉、神馬美智子、岩崎溪章、加藤弓紀子、吉岡隆紅らの名がみられ、追分節の部では、山上晴春、青山徐子、佐藤久江、横井ツツ、荒井裕子、さらに全国民謡の部には、野月吟麗、斉藤恵

宝、北村湖溪、本野湖隆、目黒敏弘らの活躍が見受けられる。

なお、空知地区民謡名人位大会における名人位・準名人位には、又村錦星、斉藤恵宝、北村湖溪、野月吟麗、佐藤久江、相模湖陽らが挙げられる。

その他、団体優勝もあり滝川民謡振興会、滝川民謡晴友会、滝川民謡隆城会の名を見る。

また、昭和四十五年、NHKのご自慢大会チャンピオン、五十一年の道新杯全道民謡競演大会江差追分の部優勝に、佐藤久江の名が目につく。

尺 八 大正六ごろ、滝川種羊場職員山本新太郎ほか数名の同好者が尺八の温習を始めており、また医師門山周通らが、料理店初音で練習をしていた。これが滝川に琴古流が広まる動機となった。

昭和五年十一月、歯科医杉村定計が本町で開業したが、学生時代たしなんでいた尺八が滝川ではあまり見受けられなかったので、当時小樽機関庫に勤務の尾山鈴童に滝川出張教授を依頼した。尾山鈴童は宗家青木鈴慕の高弟で、奥伝皆伝の名手で、杉村定計の学校の後輩であることから快諾し、昭和六年四月以来毎週杉村宅（当時広小路五丁目）で練習を開始した。尾山は勤務を終え滝川へ来て、翌朝未明に起きて小樽に帰るといふ熱心な指導が続けられた。

尾山鈴童について習ったものに、杉村定計、佐藤民次郎、山本新太郎、石丸了亮、堀要太郎、牧野茂、堀川昭紹、磯谷兄弟、山森兄弟、斉藤敵郎らがあった。

昭和九年十一月、久保茂雄が初代滝川町立社会病院院長として迎えられた。久保は学生時代からこの道を極めていたが、院長となつてからこの道の中心となった。

日華事変から太平洋戦争と戦いはますます激しくなり、練習の機会もないまま、昭和十七年「竹友会」と称し、わずかに命脈を存していた。

昭和二十年七月、札幌市民会館で札幌三曲会の発表会が開催され三曲会に入会していた竹友会もこれに参加演奏をもった。

終戦後、滝川駅勤務の日野鈴渉を中心とする駅員の同好者が練習を始め、ますます同好者が増加、ついに昭和三十年二月八日、琴古流滝川支部が結成され、指導者として久保茂雄、日野鈴渉が当たっている。

なお、滝川には尺八都山流を学んだ矢田谷寛山、小林安治らもいた。

昭和三十一年七月、旭川市朝日ビル会館で、三十二年七月に函館HBC会館で、三十三年七月には小樽市北海道博覧会場で、また昭和三十五年七月三日には滝川市民会館で演奏会をするなど毎年一回発表大会を開いている。

琴 明治四十二年、滝の川東三丁目井上包太郎の妹井上ミナは、箏曲生田流の教授として、神部東枝ほか数名の指導をしていた。神部東枝は奥許（おくゆるし）をとり、明治四十五年ごろから自宅で弟子をとり指導していた。山本ソデ及び藤田朝日庵の芸者ほか新津川からも三名ばかり習いにきていた。

明治四十四年ごろ、札幌から山田流の師匠山本喜美勢が、本町武田病院筋向いに琴、三絃を指導し数名の門人をもっていた。

大正十二年、駅前広部待合所二階で旭川山田流師範飯島美智子が出張教授をなし、二年ほど続けており加賀井京子、高宮さわ子ら一五、六名が熱心に指導を受けた。

山田流桑原タツは、砂川町小林佐都美の門人で、昭和七年頃研修の傍ら十数名の門人をいれ三年ほど指導をしている。

昭和三年頃、小樽市琴古流尺八師範尾山鈴童の妹尾山小梅が、本通り三丁目早川惣次郎宅二階を借り、生田流琴の指導を始め、広部美恵、寒河江澄子、佐藤トミ子、早川文字等の子供のほか出村コスミ、河内八重ほか数名が指導を受けたが、尾山は二年あまりで小樽に転居した。

昭和五年ごろ、砂川町前田雅楽寿美（小林佐都美）が出張教授に来て、出村コスミ、小野ゆり子、吉倉みよし、伊藤アイ、葛井よね子ら多数が、その指導を受けた。

昭和十年ごろ、小樽から師範猪股孝子を招いて、東通り五丁目中川捨三郎借家で指導を始め、芳村貞子、松沢つる、藤川八重らがその指導を受け、十七年ごろまで続いていたが、猪股の去った後、戦争も烈しくなり、しばらく中止の状態であった。

小林佐都美は滝川の出身で、滝川町婦人会長小野ときの奔走で、滝川への出張教授を始めたが、滝川の琴の元祖であり恩人ともいえる人である。昭和十六年札幌市三曲会などのすすめで札幌へ転出し正派生田流大師範前田雅楽寿美と称した。それ以来この道に精進し

多数の子弟を育て、ラジオ・テレビにも出演、北海道支部長とし等曲の普及に尽くしている。

また、今日の滝川箏曲発展は、出村雅楽都美（うたとみ）の努力によるところが大きい。出村はコスミといい滝川駅に勤務、初め尾山小梅について学び、のち小林佐都美によって奥義を究めた。

昭和七年奥組を取り、同十三年名取準師範となって雅楽都美と称し、それ以来空知太の自宅で後進の指導に当たった。昭和二十二年師範の免状を受け、昭和二十九年十一月三日に滝川町文化奨励賞を受賞、昭和三十三年七月には大師範の称号を受けた。

この道に精進すること四十有余年、後進の指導に尽力、その門下に名取をとった者も多く、久光雅楽弥寿（節子）、佐藤雅楽恵美（恵美子）、江口雅楽美耀（うたみよ・耀子）、橋本雅楽芳美（成子）、植松雅楽信美（信子）らで、昭和十八年「滝川若菜会」を組織し、多数の門人を指導していた。

生田流にはこのほか室木雅乃が家元中島雅楽之都に学び、昭和二十九年十月文化劇場で演奏会をしたこともあり、また旭川の塚野大師範の指導を受けた早川雅楽道（道子）少覚雅優、岩崎雅由美らがそれぞれ数人の子弟を指導していた。

箏曲には山田流もあり、三浦華園隣りで城里見が指導していた。

茶 道 滝川の茶道宗徧流の歴史は古い。明治三十五年一

松庵宗鶴（山本タツ）が指導したのがその始まりである。宗鶴は安政三年広島県に生まれ、明治二十九年北海道に移住、同三十五年「茶道宗徧流淑徳会」として発足、それ以来この道に精進し、昭和十年

一月、八〇歳で死去した。

その後、亡母の遺志を継ぎ二代目一松庵宗鶴(山本ソデ)を襲名し茶道の発展に尽力した。宗鶴はまた滝川婦人会の幹部として大正・昭和にかけて奔走し、終戦後昭和二十一年有志とはかって滝川町婦人会を再出発させ、その会長など社会に貢献したところが多く、昭和二十七年十一月三日滝川町文化奨励賞を受賞している。

昭和三十年六月二十三日家元千宗室来町、三浦華園で講習会を開催した。千宗室は千利休の子孫で「形から精神へ、茶道の和敬、清寂の境地」を説き、来講者に多大な感銘を与えた。

その後、宗徧流明道会北海道支部と改称、その会員は約五百名で、山本宗鶴と岡崎宗知(岡崎田鶴子)が指導に当たっていた。

昭和二十一年二月、伊藤有照を指導者として「玉川遠州流」が始められ、中山清子、山田孝子らの同好者が時々集まって練習、年一回茶会を開いてこの道の普及に努めている。

また、昭和二十一年十一月一日坂町中村ムラ宅で高桑宗敏により裏千家談交会が始められたが、昭和二十六年小松宗信により江部乙支部に吸収され、同二十九年空知支部と称されている。昭和三十年六月二十三日、三浦華園で家元千宗室来道を機会に講習会を開いた。滝川では朝日町中村ムラが指導者となり、この道の普及につとめ、役員として北村宗喜、杉浦宗房、金子多慶、佐藤ツヤ、野村育子があり、会員五十余名春秋茶会を開催している。

昭和二十三年「和交会」(中村宗村)、同三十五年二月「淡交会和美術会」(北村宗喜)が創設された。

昭和三十年、小玉韶鳳は指導者として「むつみ会」(後に橋会)を創設、会員五〇名をもって茶華道に励み、文化の向上に努めている。

昭和三十五年九月、各派会員の親睦と茶道普及のため、滝川茶道連合会を結成、前記の他に岡田、細田、上田、花尻の各社中が加盟しそれぞれ茶道発展に尽くしている。

滝川市芸術文化振興会 滝川市民に優れた芸術文化を紹介し市民文化の発展向上に寄与することを目的とし、昭和四十九年七月一日に設置されたもので、事務所は滝川文化センター内に置かれていた。

事業

- 1 優れた芸術文化事業の開催
- 2 市民芸術文化の育成協力
- 3 その他目的を達成するために必要な事業の開催

組織構成

- 1 芸術文化に関連ある機関団体の代表者
- 2 芸術文化に賛同する各機関及び団体の代表者
- 3 学識経験者

昭和五十年三月まで、顧問を置き、滝川市文化団体連絡協議会会長武田勝夫、滝川市議会議長田中君太郎、滝川市長吉岡清栄、滝川市教育長岡本義雄を委嘱した。

会長 今野正義

その他の趣味グループ

「滝川文化史」によると、大正十一年ころ、滝川警察署管内(芦別、赤平、浜益、砂川、奈井江、歌志内、新十津川、江部乙)の猟友趣味の会として、同好者七十余名が集い、「北海道中

央猟友会」が結成され会長に新十津川村の鈴木医師、副会長に久保正幹、ほか幹事五名が就任し、当時は狩猟法規の徹底をはかることが主な事業で、講演会を開いたり、小冊子の発行をしていたが数年でやめてしまった。

当時、射撃研究を目的に、新十津川石狩川畔の青年会運動場を十か年間借用し、射撃の許可を得て「クレー放出射撃」を始めたが、これも来会者が年々減少して、数年後には鈴木、久保の二名となり借用期限も切れて終息している。

昭和十三年、滝川警察署の指示により、猟友会員は全員強制加入を命ぜられ「滝川猟友会」と改称し、砂川町押尾堯が会長に就任した。

戦争がたけなわとなり、猟友義勇隊を結成し、初代隊長に久保正幹が任命されたが、この時代はすべて警察の天降り式命令で動いていた。

ついで石黒貞一、神谷源一郎、久保正幹にかわり、終戦後は道庁林務課で猟友会を解散し、「北海道猟友会」を創立し、「滝川支部」となって再発足、猟政の一端としての事務も取扱うようになり、狩猟を望む者は必ず支部を通じて届け出なければならなくなった。

菊作りは日本の伝統として個人的に育成し、観賞していた者は古くからあった。昭和の初めごろ滝川中学校校長藤本勇が菊作りをしてきたことは有名である。終戦後文化祭が盛大に行われるようになり、文化祭をいりどるものとして菊花展も行われてきた。

昭和二十八年十一月一日同好会を設立、滝川を中心に隣接市町村

を含めて滝川菊花同好会をつくり、その後は文化祭に必ず菊花展覧会を開催し、市民の観賞に供してきた。

健全なる切手趣味を発展させるため、昭和二十三年十一月三日、近接町村に呼びかけ「空知郵趣会」として発足、その後、各種の切手が発行されるようになって、趣味同好者の数が増加し、各地にもそれぞれ郵趣会が結成されたので、昭和三十年には、滝川市内だけの会員による「滝川郵趣会」と改称した。

そのころは、毎月例会を開き、時に展示会を開催し、会報を発行、昭和三十三年度の毎日新聞主催の全日本切手コンクールに入選をした。

昭和二十五年四月一日、戦後の混乱期に、平和、友愛、文化という三つの信条のもとに、文通によって国内未知の土地ばかりでなく、広く世界各国もその対象として、自分たちの手で知識をひろめ、友情を盛りあげたいとの願望により「滝川郵便友の会」が誕生し、純情な青少年の集団活動として発展していった。

郵便友の会に参加している学校は、当時滝川高校、滝川工業高校、滝川商業高校、滝川江陵中学校の四校であって、各学校にはそれぞれ「郵便友の会クラブ」が作られ顧問の教師が一名から二名いて指導に当たっていた。またこれらの四校が集まって「滝川郵便友の会連合会」が作られ、全般的活動はこの連合会で行っていた。

昭和二年三月、栄町にいた赤沢源五郎（元南空知太小学校長、秋水と号した）を中心に刀剣を愛好していた、以山慶吉、前田久吉、杉本文吉、金子協平、小泉舜三、中川捨三郎、斉藤正幸らによって「滝川

刀剣同好会」を結成し、時おり会合をして刀剣の鑑賞をし楽しんでいたが、終戦と同時に美術品としての刀剣で届け出られたものだけの所持を認められることとなり、本会は散会した。

滝川市内住民の食生活の向上をはかり、料理に関する知識技能の習得向上に努め、進んで実践研究することによって家庭人の育成に役立てようと、昭和三十二年四月一日「滝川料理クラブ」が誕生した。

行事としては、料理講習会、講演会、研究会などで、会長は杉村哲子、副会長は武田セイ、神部テル、林ミツである。

〈滝川文化史〉

荒木珠好塾主荒木多美男は、大正八年五月二日金沢市西堀川町の出身で、金沢市珠光塾で六カ月ほど珠算を修得して、昭和二十三年親が滝川に在任していたため来滝し電気工事の店舗を出した。

たまたま経理関係の仕事を手伝ったことから珠算の指導を乞う者が出てきたので、昭和二十七年七月、七、八名の希望者を指導していたところ、しだいに希望者が続出し、秋には八〇名を超えるようになった。

昭和二十八年四月一日、荒木珠好塾（明神町二三〇番地）を創設して、小学校二年くらいから一般に至るまで百余名が毎日通うようになり、珠算熱は急激に高まった。

その後行われた「空知珠算競技大会」で受賞の半数以上を獲得する好成績を収めたり「全道珠算競技大会」に参加した昭和三十一年より毎年のように一、二位を占め、荒木珠好塾の名を博した。

滝川珠算連盟

産業教育の振興を図るために、珠算に関する調

査研究と必要な指導、助成を行い、併せて関係諸団体と緊密な提携を以て、滝川地方の珠算の普及向上並びに産業の発展に寄与するを目的とし、昭和三十八年十一月より発足。「荒木賞」を制定して、毎年滝川地区珠算競技大会における、小・中学生の部、それぞれの最高点者にこれを贈るよう、昭和四十二年十一月より実施して、日に及んでいる。滝川地区長 本山英治、山口 勇。

一ノ瀬珠算塾

開設代表者 田湯静夫 所在地 滝川市朝日町西一丁目七番二一
開設 昭和三五・五・一 指導者 田湯勝子、惣戸美華

梅村珠算塾

開設代表者 梅村忠雄 所在地 滝川市一の坂町東一丁目二番
一 開設 昭和四〇年四月一日 指導者 梅村忠雄（珠算教育

士）、梅村幸子

本山珠算塾

開設代表者 本山英治 所在地 滝川市泉町一丁目一〇番一八
開設 昭和三四年八月一日 指導者 本山英治

堺 珠算塾

開設代表者 川口恵美子 所在地 滝川市大町三丁目二番一二
号（本校） 滝川市西町六丁目六番四五（分校）
開設 昭和四三年一月三日（本校） 同四八・六・四（分校）

指導者 川口恵美子（全珠連八段）

山口珠算塾

開設代表者 山口 勇 所在地 滝川市緑町六一五―四九
開設 昭和三五年四月一日 指導者 山口 勇（珠算教育士）

山口恭子

佐々木珠算塾

開設代表者 佐々木美津子 所在地 滝川市江部乙町東一一丁
日九―一六

開設 昭和三二・四

指導者 佐々木美津子

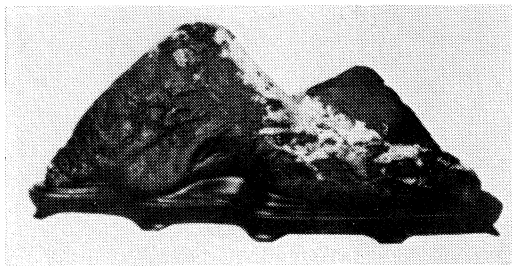
以上のほかに市内には次の塾がある。

朝日珠算塾（金田チエ子 朝日町東一―七―一八）、荒木珠好塾（荒木多鶴

子明神町三―七―二五）、小谷珠算塾（小谷武司 花月町一―一〇―一）、滝川

速算塾（堀江閨子 明神町三一三三）、滝川珠算学院（小林由隆 朝日町東四一一三三）、本間珠算塾（本間正義 江部乙東二一一一四九）、円山珠算塾（円山京子 江部乙町東二一九一四六）、たまえ珠算塾（渡辺恭子 北滝の川一一一七）。

「自然石趣味の会 明治二十三年六月、滝川（現本町二丁目）に移住して、雑貨と米を扱う店をしていた花摘熊吉は、なかなかの風流人で、わずかの時間をさいては神居古潭石を採石したり、金山石を求めたり、台座を作り楽しんでた。当時の金山石の台座に「明治二十七年四月」とあるが、このころが滝川における愛石趣味の始まりである。



花摘熊吉が大正九年十二月世を去り、二代目の花摘新作も親ゆずりの書画を好み石を集め、その台座は家具建具職人遠藤勇太郎が引受けていたが、遠藤が石好きとなったのは当然のこと、大正十三年六月採石して「残雪」と銘をうった石は今も残っている。このころになると石好きが、少しずつ出てきた。

昭和に入ると同好者もふえ、「滝川美術同好会」が生まれ、月一回会場持ちまわりで、書画、骨董、焼き物、刀剣、観賞石などの交換会が開かれたりしていた。

終戦後、昭和二十三年に同好会の再発

足がなされたが、まだ石だけの同好者は少なかった。

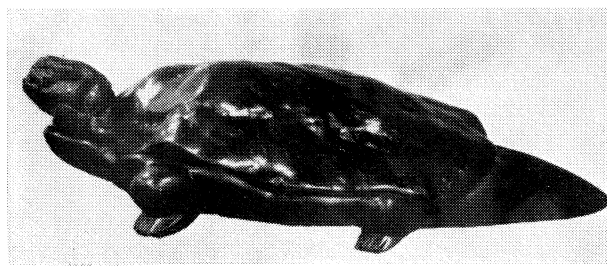
その後、徐々に愛石熱も高まり、昭和三十八年一月には三十余名の同好者ができ、同年三月第一回展示会を市民会館図書室で開き、昭和四十年になってから中部北海道各市町村愛石会の連合体を結成し第一回の連合展を滝川市民会館で開催した。

「滝川自然石趣味の会」の、昭和四十一年役員改選が行われ、小池勝夫が二代会長に選ばれたころには、若い人たちも多くなって、一段と活発になった。

昭和四十三年、再び金子協平が会長になったときが、石ブームの最高潮時代で一般大衆の中にも拡がっていった。売られる石も多種多様で、美石、化石、加工石、自然石とさまざまであり買う人も多かった。

昭和四十九年に入ってからは、全国的に石の趣味は少しずつ落ち付き、一時的ブームに乗った愛好者はしだいに影をひそめ、本当に石を好む人たちのみが残ってきたという感じがするようになり、一時のお祭り騒ぎはなくなり、いい意味の愛石熱のこもった人たちの静かな歩みとなった。

会員の減少、採石旅行などをしても良い石もなく、展示会も思うようにできなくなり、若手後継者も集まりがなくなっ



たので、昭和五十四年八月二十二日「自然石趣味の会」は解散した。

会長 一期 金子協平、二期(昭41) 小池晴夫、三期(昭43) 金子協平、四期(昭46) 上野圭介、五期 上野圭介

なお、滝川愛石の歴史の中で忘れられないものとしては昭和二十九年から四十二年まで時おり滝川を訪れた書道家上田桑鳩の空知川探石、昭和四十三年開道百年にあたり、天皇・皇后両陛下本道においでの時、旭川工専の御座所にて、滝川の会から陣上哲弥秘蔵の石ほか松尾政治、高沢清、金子協平の石を御覧頂いたことなどである。

滝川ハンタークラブ 昭和四十七年八月、狩猟法に基づく狩猟免許者により、北海道猟友会滝川支部を結成し、単なる部会活動のみではなく、自主団体として銃器による事故防止、無違反、会員親睦を目的とし、有害鳥獣(からす、山鳩、狐、野兔)の駆除、鹿共同狩猟、銃刀法、狩猟法の講習会などを行ってきた。

結成時は会員一〇〇名、昭和五十四年九月には、江部乙部会を合併し、行政区域内一本化を図り、五十四年現在、会員一一〇名である。

特筆される活動としては、ごみ埋立地周辺における鳥駆除、市営牧場の狐駆除などがあげられる。

歴代会長

古館 健一(昭和四二年) 北村 正雄(昭和四九年)
佐々木市之助(昭和五年) 岸 二郎(昭和五年)

滝川市漁釣会 昭和四十五年四月、愛釣者の親睦と自制心を養い釣師の模範となるよう心がけ、地域社会に貢献、寄与することを

目的として結成し、総会を毎年一月行って行事を決定。釣大会の開催、釣情報の交換、地域社会への貢献などの事業としては、十周年記念として滝の川公園桜苗木の植樹、滝川公園稚魚放流などが予定されている。

結成当時会員一七名も、昭和五十四年度四八名となり、滝川市近郊在住者により、親睦をたかめている。

歴代会長

湯浅 直市	昭和四〇年	齊藤 清寿	昭和四二年
本間 将晴	昭和四二年	鈴木 光夫	昭和四二年
種部 英雄	昭和四二年	佐藤 庄三	昭和四二年
		現	

石狩川へら鮎釣研究会 昭和四十七年四月、へら鮎釣の研究と愛好者をもって組織し、会員相互の親睦と併せて、釣場の保護とへら鮎の愛護を図ることを目的として設置、はじめ一六名であった会員も、五十四年現在では二七名となっている。

昭和五十年四月には、「例会規定」を制定、この規定の周知徹底をし、本会目的に添う釣人となるよう、相互研さんに努め、親睦を深めている。

なお、規定には、例会入賞について(1)重量の部、(2)身長部の部、(3)注意事項があり、年間賞においては(1)重量の部、(2)身長部の部、(3)皆勤賞となっていて得点につき明示している。

釣った魚は持ち帰らず、放流して鮎の保護に努め、将来への楽しみを持続していること、西五丁目沼の公園化とへら鮎釣場の造設による将来の観光要請などは、特筆すべきことである。

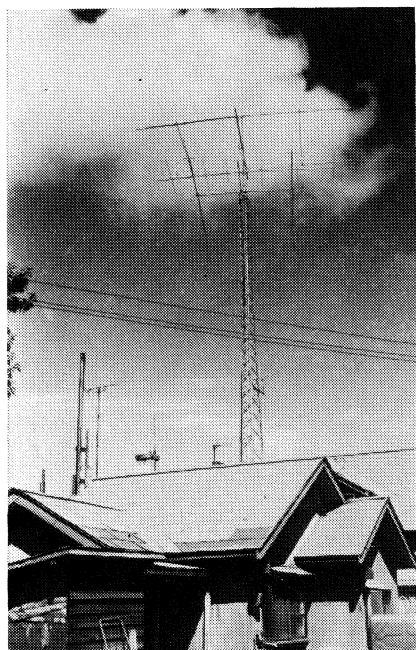
歴代会長

山本 芳雄（昭和昭・昭） 井上 富一（昭和昭・一）（現在）

滝川アマチュア無線クラブ 昭和三十五年、滝川地方にハムグループ誕生、その後グループとしてテストの段階を経ていたが、昭和四十五年四月、滝川アマチュア無線クラブ結成の運びとなった。

「営利を目的としないでアマチュア無線の健全なる発達を図り、会員相互の友好を躍進し併せて無線科学の向上と発展に寄与する」を目的に、滝川市及び新十津川町に在住するものによって構成し、会員は、アマチュア無線設備の操作を行うことができる無線従事者の資格を有する正員と、上記以外の者であつてアマチュア無線技術に興味を有する準員の二種のほかに、家族会員がある。

アマチュア無線は、一般的には趣味であるといわれるが、格調の高いものである。それは、アマチュア無線には科学性、社会性、国際性があり、他の趣味にない電波法という裏付けがあり、その権利



アマチュア無線

が守られると共に正しい運用という義務行為も果たしているからである。

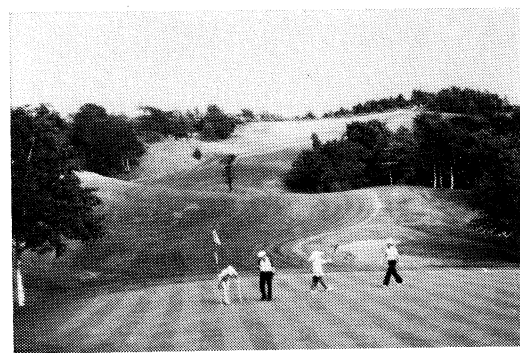
歴代会長

真島 寅行	昭和昭年	渡辺 一男	昭和昭年
佐藤 定市	昭和昭年	石井 豊	昭和昭年
一岡外喜男	昭和昭年	山口 真彰	昭和昭年
大崎 俊逸	昭和昭年		

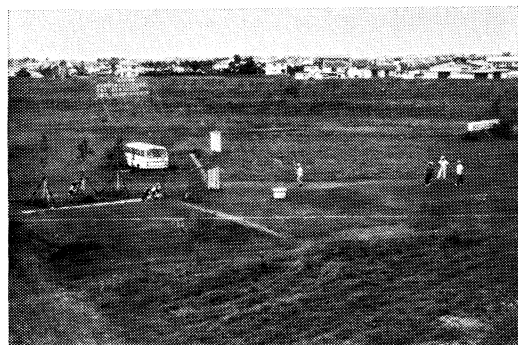
ゴルフ 昭和三十八年ごろから気軽に楽しめるゴルフ場の建設を望む愛好者の声が急速に高まり、健康増進、レジャー、憩いの場として広まっていった。

◎空知ゴルフ場 砂川市字富平

昭和三十九年「株式会社空知ゴルフ場」が創立され、翌四十年六



空知ゴルフ場18番ホール



滝川市民ゴルフ場

月、コースを完成してオープン、四十七年「空知観光開発会社」と改称、創立以来の出資者などが、役員、社員として経営を続け今日に至っている。

コース規模は、一八ホール、五、五九三メートル、パー七二である。

◎松尾ゴルフセンター 明神町四丁目一八 代表者 松尾 政治

昭和四十二年創立、会員制により経営、会員二〇〇名。

◎滝川ゴルフセンター 朝日町東二丁目一七 経営者 新保俊雄

◎滝川市民ゴルフ場 泉町 経営者 滝川振興公社社長 吉岡 清栄

(第十三編第三章第六章憩いの場に記述)

ゴルフ愛好者の状況

◎空知カントリークラブ 滝川市内外の愛好者を対象とし、事務局を砂川市富平空知ゴルフ場ハウス内に置く。

◎滝川ゴルフ同好会 代表者 関矢 孝一 昭和四十四年五月発足、会員一三〇名。

滝川市(近隣を含む)居住又は勤務する人の同好会とし、初心者の育成と親睦に努め、事務局を栄町三丁目高畑運動具店内に置く。

◎若葉会 代表者 神部 和典

昭和四十五年発足、会員は主に建設業者で六〇名、事務局を大町一丁目一八滝川建設協会内に置く。

◎市役所ゴルフ同好会 代表者 東藤 順治

昭和四十八年七月発足、会員三四名、事務局を市役所内労働福祉課内に置く。

◎中山組不二建設ゴルフ同好会 代表者 中山 健三

昭和五十二年発足、会員三一名、事務局を明神町四丁目中山組内に置く。

◎ゴンロク会滝川支部 代表者 柳 清治 滝高一九五六年卒業生を会員とし、滝川市在住者中、二〇名のゴルフマニアによる。

事務局を栄町三丁目一九 小清水邦男宅に置く。

◎滝高ゴルフクラブ 代表者 渡辺 義男

昭和三十一年発足、会員二五名、事務局を滝川高校内に置く。

◎滝川工業高校職員ゴルフ同好会 代表者 井畑 定哲

昭和五十三年発足、会員一二名、事務局を滝川工業高校内に置く。

◎ウエストリングクラブ 代表者 道川 順也

昭和五十四年発足、会員一四名、事務局を滝川西高校内に置く。

◎北門猛打会 代表者 宮本三伎男

昭和四十二年発足、会員二五名、事務局を本町一丁目一、北門信用金庫本店内に置く。

◎三師会 代表者 守屋 守 同好者一五名、親睦行事として実施する。

◎江部乙ナイスショットの会 代表者 三栗 自然

昭和五十三年発足、会員一八名、事務局を江部乙町西一丁目菅原清吉宅に置く。